

個体群生態学会会報

No. 71

2014年8月

第9回「個体群生態学会奨励賞」候補者募集	会長 齊藤 隆	1
特定非営利活動法人 (NPO) 個体群生態学会としてのご挨拶	会長 齊藤 隆	2
第30回個体群生態学会大会 (つくば大会) 開催のお知らせ (2014年10月10日~12日)	山村光司・徳永幸彦	3
第29回個体群生態学会大会 (大阪大会) 開催報告 (2013年10月11日~13日)	石原道博	5
日本とアメリカの進化学・生態学の研究、どう違うか?	デービッド・ヘンブリー (David H. Hembry)	10
研究室紹介		
龍谷大学 理工学部 近藤研究室	近藤倫夫	18
信州大学 学術研究院理学系 浅見研究室	高橋美樹	21
書評		
Trait-Mediated Indirect Interactions: Ecological and Evolutionary Perspectives Edited by Takayuki Ohgushi, Oswald Schmitz and Robert D. Holt (2012), Cambridge University Press	石原道博	25
事務局報告	内海俊介	27
Population Ecology 編集報告	佐藤一憲	33
会則		36
会員異動		42
編集後記	石原道博	44

第9回「個体群生態学会奨励賞」候補者募集

「個体群生態学会奨励賞」は、個体群生態学の一層の発展を図ることを目的として、個体群生態学の優れた業績を挙げた国内外の若手研究者を表彰するものです。本学会員、もしくは、Population Ecology（あるいは Researches on Population Ecology）に論文を掲載したことのある者を対象とし、自薦による応募者もしくは会員から推薦された者の中から、毎年1名の受賞者を選考して賞状が贈呈されます。受賞候補者の募集を下記の要領で行いますので、この賞の趣旨を充分ご理解のうえ、ふるってご応募・ご推薦いただきますようお願いいたします。

2014年7月1日

個体群生態学会会長

齊藤 隆

記

1. 受賞候補者の条件：個体群生態学会の若手会員、もしくはPopulation Ecology（Researches on Population Ecology）に論文を掲載したことのある若手研究者
2. 応募書類：（1）候補者の氏名・所属・連絡先、（2）略歴（他薦の場合はわかる範囲で記入）、（3）業績リスト（主な業績5件までに○印を記入）、（4）推薦の理由（A4用紙1枚以内）。ただし、選考委員会から追加資料を問い合わせることがあります。
3. 送付先：Emailか郵便でお送りください。Emailの件名か郵便封筒の表に、「個体群生態学会奨励賞応募書類」と記入してください。受領確認の連絡がない場合は問合せください。
〒074-0741 北海道雨竜郡幌加内町母子里
北海道大学北方生物圏フィールド科学センター
個体群生態学会事務長 内海俊介
(email:utsumi@fsc.hokudai.ac.jp)
4. 締切：2015年3月31日（必着）

以上

特定非営利活動法人 (NPO) 個体群生態学会としてのご挨拶

会長・齊藤 隆

法人登記

個体群生態学会は2014年3月26日に特定非営利活動法人として京都市に認証され、京都地方法務局に登録されましたので報告します。学会としての本質は何も変わりませんが、社会的人格が法律的に明示されましたので、これまで以上にコンプライアンス（法令順守）に心がけて活動してまいります。

NPO と任意団体

さて、新法人の登記は完了しましたが、これまでの任意団体としての学会がすぐになくなるわけではありません。当面は任意団体からNPO法人への移行期となります。登記の段階では、NPO法人は設立時会員（理事と監事）だけによって構成されており、多くの会員の皆さんは、まだ、任意団体の会員であり、NPO法人の会員になっていただいております。今年度はこの会員の移行が大変重要となります。以下に会員移行の手順について説明させていただきます。

移行の手順

移行の手続きはできるだけ簡素にしたいと思います。執行部で検討している手続きは、来年度の会費をお支払いする際に納めていただく会費は任意団体のものではなく、NPO法人の会費であることを説明し、会費の納入をもってNPO法人の会員になっていただくことに同意したこととみなす、というものです。会費の納入方法には、郵便振替、銀行口座引き落とし、銀行口座入金などがあり、それぞ

れの納入方法にどのように対応するかについて検討を進めています。

秋の総会では、移行手続きをより具体的に説明したいと思います。NPO法人への移行が円滑に進みますようにご協力ください。

個体群生態学会を取り巻く状況の変化

昨今、研究倫理をめぐる大きな社会問題が起きており、学会の社会的な役割が問われています。運営においてコンプライアンスを徹底することは言うまでもありませんが、研究者の健全な活動の「場」としての個体群生態学会をどのように育てていくかについて、法人化を機に改めて考えることは重要なことだと思います。個体群生態学会はこれまで社会問題となるような不正とは全く無縁でした。これからは臆することなく、生態学を深化、発展させることに邁進することを第一に考えてよいと思います。幸い機関誌のPopulation Ecologyの編集は順調で、投稿数は増加し続けています。インパクトファクターは2.29（2011年度）を記録した後、やや下降しましたが、佐藤一憲編集長らのご努力下、今年度からたくさんの特集論文や招待総説が掲載されることになり、すぐに回復されるものと期待されます。出版を委託しているSpringer社は、これらの活動を高く評価しており、編集活動やシンポジウム開催について支援を続けてくれています。

Population Ecologyの発行と研究集会の開催は学会活動の両輪です。秋に開催される研究集会には多数の会員が参加されることを期待しております。つくばでお会いしましょう。

第 30 回個体群生態学会大会開催のお知らせ

山村光司 (大会会長)・徳永幸彦 (大会会長・実行委員長)

日時：2014 年 10 月 10 日 (金) ～12 (日)
筑波大学 学会館および総合交流会館
〒 305-8577 茨城県つくば市天王台 1-1-1
大会ウェブページ：<http://pe.ska.life.tsukuba.ac.jp/PES30>

大会参加費・懇親会費

		一般会員	学生会員	非会員
大会参加費	8 月 15 日まで	6,000 円	4,000 円	7,000 円
	8 月 16 日から	7,000 円	5,000 円	8,000 円
懇親会費	8 月 15 日まで	5,000 円	3,000 円	6,000 円
	8 月 16 日から	6,000 円	4,000 円	7,000 円

大学の学類 (学部) 学生 (中・高校生を含む) の大会参加費は無料とする。ただし、学類 (学部) 学生が発表をする場合は、学生会員として大会参加費を払うものとする。

参加費・懇親会費振込先

口座名：第 30 回個体群生態学会大会
(ダイサンジュッカイコタイグンセイタイガッカイタイカイ)
口座番号：00130-5-790718
ゆうちょ銀行以外からの振込をされる場合は、以下内容をご指定下さい。
店名 (店番) ○一九 (ゼロイチキュウ) 店 (019)
貯金種目 当座
口座番号 0790718

大会日程 (予定)

10 月 10 日 (金)	13 時～16 時	運営委員会
	15 時～18 時	行列のできる統計相談所
10 月 11 日 (土)	09 時～12 時	基調シンポジウム A
	12 時～14 時	ポスターコアタイム A
	14 時～16 時	企画シンポジウム
	16 時～17 時	授賞式・受賞講演
	17 時～18 時 20 分	総会
	18 時 30 分～20 時 30 分	懇親会
10 月 12 日 (日)	09 時～12 時	基調シンポジウム B
	12 時～14 時	ポスターコアタイム B
	14 時～16 時	企画シンポジウム

基調シンポジウム A: Statistics and Population Ecology

企画者：徳永幸彦・他

統計学の中の大きな 3 つのパラダイム (頻度主義、最尤法あるいは情報統計量、ベイズ) それぞれについて、3 人の演者に、個体群生態学と絡めて講演してもらいます。最尤法については、The Nature of Scientific Evidence (2004) の編者としても知られる Mark L. Taper 氏に講演してもらいます。ベイズ統計については、群集生態学者であり

ながら統計に明るく、数々の Bayesian なアイデアを展開している Robert M. Drazio 氏に講演してもらいます。そして 3 人目は大会会長を努める山村光司氏に、前出 2 名を迎え撃ち、びしっと天下の頻度主義で締めて頂く予定です。

Plenary Speakers

Mark L. Taper (Montana State Univ.)

Robert M. Drazio (Southeast Ecological Science Center U.S. Geological Survey)

山村光司 (農環研)

基調シンポジウム B: Caling from life-histories to ecological dynamics

企画者: W.A. Nelson, 山中武彦・他

個々の生物が持つ個性、特に生育段階や年齢は、個体間の相互作用を通じて全体としての個体群の挙動に大きな影響を与えます。本シンポジウムでは、洗練された年齢構成モデルの継承者である William A. Nelson 氏 (カナダ Queen's 大学) をオーガナイザーにお招きし、コンピューター統計を駆使した個体群動態解析の権威である Ottar N. Bjornstad 氏 (米国ペンシルベニア州立大学)、進化相互作用動態のモデル解析で有名な山道真人氏 (京都大学) らに、最新の研究を紹介していただく予定です。

Plenary Speakers

William A. Nelson (Queen's University, Canada)

Ottar N. Bjornstad (Pennsylvania State University, USA)

Speakers

山中武彦 (農環研)

山道真人 (京都大学)

行列のできる統計相談所

相談員として粕谷英一 (九州大学) 氏と三中伸宏 (農環研) 氏に参加頂きます。PES30 に参加する人は誰でも、自分の抱える統計学的難問を持ち込み相談できます。相談はおそらく議論を呼び、最終的に有意義な解法が諦めの、どちらかを持ち帰ることになります。

企画シンポジウムの企画募集のお知らせ

公募の結果にもとづき、2~4 件ほどを選定する予定です。

一般講演 (ポスター発表) ・参加の申し込み

一般講演 (ポスター発表) の申し込みは、大会ウェブサイトをよく読んで、要領に従って申し込んで下さい。

第 30 回大会実行委員会

大会会長: 山村光司 (農環研)、徳永幸彦 (筑波大)

実行委員長: 徳永幸彦 (筑波大)

実行委員: 横井智之 (筑波大学)、山中武彦 (農環研)、吉田勝彦 (環境研)

大橋一晴 (筑波大学)、香月雅子 (筑波大学・PD)

益子美由希 (農環研・PD)

最新の情報は、大会ウェブサイトをごらんください。

第 29 回個体群生態学会大会 開催報告

石原道博

第 29 回個体群生態学会大会は、2013 年 10 月 11 日から 13 日までの 3 日間、大阪府立大学中百舌鳥キャンパスにて開催された。1 日目のプログラムは運営委員会のみでしたので、一般参加者にとっては 10 月 12 日から 13 日の 2 日間が実際の大会期間であった。企画の当初は、学部生を対象にした秋の学校や農学など応用分野を対象にしたシンポジウムの開催も予定していたのだが、最終的にはポスター発表を除く講演会場は 1 つだけというコンパクトな大会となってしまった。スタッフ 3 人と少数の学生だけという我々の戦力では、今回の規模で行うのが精一杯だったように思う。しかしながら、合宿時代のように専門分野が異なる参加者たちが 1 つの会場で議論を交わすことができたことは良いことで、個体群生態学会の古い時代を思い出すような内容の充実した大会になったと思うのは私だけだろうか。

大会基調シンポジウムは 2 題開催した。1 題は、難波さんが企画した Network Structure and Dynamics of Ecological Communities で、基調講演者としてアメリカの Stefano Allesina (Department of Ecology & Evolution, The University of Chicago) とフランスの Elisa Thébaud (CNRS Biogéochimie et écologie des milieux continentaux) を招聘した。この基調シンポジウムの内容は Population Ecology 誌の特集となることが決まっている。もう 1 題は、私と内海さんで企画した Evolutionary and Population Ecology of Maternal Effects で、こちらは基調講演者としてアメリカの Charles W. Fox (University of Kentucky) を招聘した。Fox には今回の発表に関連した論文の Population Ecology 誌への寄稿が予定されている。Fox がマ

メゾウムシを研究材料にされていることもあり、シンポジウム終了後にはマメゾウムシ研究者による記念撮影も行われた。若い人が増えたのは希望で、個体群生態学における内田俊朗先生から続くマメゾウムシ研究の火はまだまだ盛んに燃え続けそうです。

公募による企画シンポジウムも「目に見えない相互作用を描くための挑戦」と「繁殖干渉：オスの見境の無さがもたらす進化的・生態学的帰結」の 2 件が開催され、活発な議論が行われた。個体群生態学会奨励賞は今年は 2 人が受賞し、高橋佑磨さんと仲澤剛史さんが受賞講演を行った。ポスター発表は 30 題と例年よりも少ないながらも、それなりに盛況だったように思う。今回の懇親会では高級な日本酒を一升瓶で 3 本用意したが、そのあまりの美味しさにあつという間に 3 本が空となってしまった。

財政面ではシュプリングーから 20 万円、堺市から公益社団法人堺観光コンベンション協会を通じて 10 万円の補助があった。また、外国人研究者 2 名分の招聘費は大阪府立大学大学院理学系研究科から支出された。もう 1 名の外国人研究者の招聘費は、科学研究費補助金基盤研究 C (代表者：石原道博) より支出された。これらの支援によって、大会収支は黒字となることができた。

最後に、本大会を支えていただいた大会会長の難波利幸さんと会計・ウェブ担当の江副日出夫さん、基調シンポの企画に関わって下さった内海俊介さん、企画シンポの企画を引き受けて下さった米谷衣代さん、大会の準備や運営を手伝ってくれた大阪府立大学の学生諸氏、企画シンポジウム企画者、個体群生態学会事務局には、この場をお借りしてお礼を申し上げます。

- 会期：2013 年 10 月 11 日 (金) ~ 13 日 (日)
- 会場：大阪府立大学中百舌鳥キャンパス (堺市)
- 大会実行委員会：難波利幸 (大会会長)、石原道博 (大会実行委員長)、江副日出夫

■参加者内訳 (アルバイト学生を除く)

大会参加：99名 (うち9名が参加費無料対象の学部生)

ポスター発表：30名

懇親会：64名

■個体群生態学会奨励賞 受賞講演

- ・ 遺伝的多型の維持機構を検証する
高橋佑磨 (東北大学 国際高等研究教育機構 学際科学フロンティア研究所)
- ・ Ontogenetic growth matters in community ecology
仲澤剛史 (国立成功大学)

■ポスター賞

最優秀賞

- ・ 侵入地において、セイタカアワダチソウは天敵から解放されているのか?
-原産地と侵入地における植食者昆虫の分布パターンの比較-
*坂田ゆず (京大・生態研), Joanne Itami (University of Minnesota, Duluth),
Timothy P. Craig (University of Minnesota, Duluth), 大串隆之 (京大・生態研)

優秀賞

- ・ モモノゴマダラノメイガの分子系統に関する研究：全国に混在する2系統の分布
*青島正昂 (岐阜大・応用生物), 中秀司 (鳥取大・農),
土田浩治 (岐阜大・応用生物)
- ・ 生態系・代謝過程を考慮した生物濃縮モデル
*中井信吾, 近藤倫生 (龍谷大・理工)
- ・ 捕食者のストイキオメトリーの二型化：共食いをするサンショウウオを使って
*高津邦夫 (北大・院・環境科学), 片山昇, 岸田治 (北大・北方生物圏 FSC)

■基調シンポジウム A

Network Structure and Dynamics of Ecological Communities

Organizer: Toshiyuki Namba (Osaka Prefecture University)

- ・ The stability-complexity debate at age 40
Stefano Allesina and Si Tang (University of Chicago)
- ・ What generates the stabilising effect of interaction-type diversity in ecological communities?
Michio Kondoh (Ryukoku University) and Akihiko Mougi (Shimane University)
- ・ Does massively-parallel pyrosequencing revolutionize empirical studies of ecological networks?
Hirokazu Toju (Kyoto University)
- ・ Structure and stability of networks with mutualistic and antagonistic interactions
Elisa Thébault, Colin Fontaine, and Alix Sauve (CNRS)
- ・ Spatial complexity and community stability
Akihiko Mougi (Shimane University)
- ・ Models of species abundance distributions based on population dynamics
Kei Tokita (Nagoya University)

■基調シンポジウム B

Evolutionary and Population Ecology of Maternal Effects

Organizers: Michihiro Ishihara (Osaka Prefecture University) and Shunsuke Utsumi (Hokkaido University)

- ・ Evolutionary Ecology of an Adaptive Maternal Effect: Egg Size Plasticity in a Seed-Eating

Beetle

Charles W. Fox (Department of Entomology, University of Kentucky)

- Maternal effects on family dynamics: causes and consequences of variation in trophic-egg production of burrower bugs
Shin-ichi Kudo (Naruto University of Education)
- Differential allocation as a maternal reproductive strategy in songbirds
Masayo Soma (Department of Biology, Hokkaido University)
- Mother plants with aphid infection transgenerationally enhances population growth of aphids on offspring seedlings
Noboru Katayama (Field Science Center for Northern Biosphere, Hokkaido University),
Alessandro Oliveira Silva, and Takayuki Ohgushi (Center for Ecological Research, Kyoto University)

■企画シンポジウム 1

目に見えない相互作用を描くための挑戦

企画責任者：米谷衣代（京都大学 生態学研究センター）

- 環境DNAを用いた水中生物モニタリングの現状
源 利文（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）
- 同位元素を用いた食物網の記述
原口 岳，陀安一郎（京大・生態研）
- DNA バーコーディングによって熱帯の昆虫と植物の相互作用網を紐解く
岸本 圭子（東大・院・広域）
- 昆虫体表の微生物群集を利用した送粉昆虫-植物ネットワークの推定
潮 雅之（京大・生態研），永野 惇（京大・生態研、JST さきがけ），山崎 絵里（京大・生態研），高巢 裕之（京大・生態研，東大・大気海洋研究所），藤永 承平（京大・生態研）

■企画シンポジウム 2

繁殖干渉：オスの見境の無さがもたらす進化的・生態学的帰結

企画責任者：京極大助（京都大学大学院 理学研究科 動物生態学研究室）

- 種間求愛・繁殖干渉がなくなる理由
高倉 耕一（大阪市環科研），西田 隆義（滋賀県立大・環境生態），巖 圭介（桃山学院大・社会）
- 過去の競争実験にみられる繁殖干渉
岸 茂樹（東大院・農）
- 繁殖干渉による棲み分けと資源利用の統一的な説明
西田 隆義（滋賀県立大・環境生態），高倉 耕一（大阪市立環境科学研），巖 圭介（桃山学院大・社会）
- 最後のピース：植食性昆虫の食草選択に対する繁殖干渉の影響
大秦 正揚（京都学園大学），大崎 直太（山形大学）
- 繁殖干渉の検証としての島の生物地理学：イヌノフグリを例に
高倉 耕一（大阪市環科研），藤井 伸二（人間環境大）

■ポスター発表

- P01 沖縄県本部町におけるコノハチョウ *Kallima inachus* の個体数の時空間変動．中井 桃子（琉球大・院・農），柿嶋聡（静岡大・創造院），辻和希（琉球大・農）
- P02 生物的防除のパラドックス：複数種の天敵の導入は効果的か？ 池川雄亮，江副日出夫，難波利幸（大阪府大院・理）

- P03 モモノゴマダラノメイガの分子系統に関する研究:全国に混在する2系統の分布. 青島正昂(岐阜大・応用生物), 中秀司(鳥取大・農), 土田浩治(岐阜大・応用生物)
- P04 トランسكريプトーム解析で迫るエゾサンショウウオの表現型可塑性の分子機構. 松波 雅俊(北大・地球環境), 岸田 治(北大・FSC), 北野 潤(遺伝研・生態遺伝), 道前 洋史(北里大・薬), 三浦 徹(北大・地球環境), 西村 欣也(北大・水産)
- P05 植物と菌類の動的な栄養交換に関する理論研究. 内之宮光紀, 巖佐庸(九州大学)
- P06 侵入地において、セイタカアワダチソウは天敵から解放されているのか?-原産地と侵入地における植食者昆虫の分布パターンの比較-. 坂田ゆず(京大・生態研), Joanne Itami (University of Minnesota, Duluth), Timothy P. Craig (University of Minnesota, Duluth), 大串隆之(京大・生態研)
- P07 血縁度が協力レベルの多型進化に与える影響. 伊藤公一, 山内淳(京都大学・生態研セ)
- P08 ホソヘリカメムシの交尾前性選択. 洲崎雄(岡山大・院・環境), 香月雅子(筑波大・院・生命環境科学), 宮竹貴久(岡山大・院・環境生命), 岡田泰和(東京大・院・総合文化), 岡田賢祐(岡山大・院・環境生命)
- P09 気候と生理生態学的要素に基づく広域的なマラリア媒介蚊各種の時空間的分布の予測. 加我拓巳, 太田俊二(早大・院・人間科学)
- P10 生態系・代謝過程を考慮した生物濃縮モデル. 中井信吾, 近藤倫生(龍谷大・理工)
- P11 シラタマノキ種子の動物散布と発芽のハビタット間比較. 野村七重, 露崎史朗(北大・環境科学院)
- P12 偏った性比による絶滅回避. 伊東啓, 上原隆司(静岡大・創造院), 守田智(静岡大・工), 泰中啓一(静岡大・創造院), 吉村仁(静岡大・創造院)
- P13 捕食者のストイキオメトリーの二型化: 共食いをするサンショウウオを使って. 高津邦夫(北大・院・環境科学), 片山昇, 岸田治(北大・北方生物圏 FSC)
- P14 ふ化タイミングのずれはサイズ依存の捕食被食関係の強さを左右する. 野坂恵(北大・院・環境科学), 片山昇, 岸田治(北大・北方生物圏 FSC)
- P15 ハナグモによるヤナギルリハムシ幼虫の行動変化を介したトップダウンカスケード. 平野滋章(京大・生態研), 大串隆之(京大・生態研)
- P16 Antagonistic indirect interactions between large and small frog tadpoles via larval salamander predator. Aya Yamaguchi (Graduate school of Environmental Science, Hokkaido University), Noboru Katayama, Osamu Kishida (Field Science Center for Northern Biosphere, Hokkaido University)
- P17 Close-packing stress against newcomers: the spacing mechanism of heron colon distribution. Miyuki Mashiko, Yukihiko Toquenaga (Univ. of Tsukuba)
- P18 アズキゾウムシのオス交尾器に見られる損傷. 京極大助, 曾田貞滋(京都大・院・理)
- P19 砂浜に侵入したセアカゴケグモによる在来希少種へのトップダウン効果. 高木俊(東邦大・理)
- P20 Climate influences cyclic patterns of vole populations through altering ecological communities: advanced density dependence analyses using time-series data on the Hokkaido vole. Takashi Saitoh, Noelle I. Samia (Northwestern University), Osnat Stramer (University of Iowa), Nils Chr. Stenseth (University of Oslo)
- P21 Ecological resilience of population cycles: a dynamic perspective of regime shift. Kenta Suzuki (U Tokyo), *Takehito Yoshida (U Tokyo)
- P22 実験生態系の個体群動態に生化学反応を入れる. 細田一史(大阪大・未来), 浅尾晃央(大阪大・生命), 鈴木真吾(理研・QBIC), 四方哲也(大阪大・情報)
- P23 タケノコ採集の生態学~タケノコの収穫における親ササの数と太さの重要性~.

- 片山昇, 岸田治, 坂井励, 伊藤欣也, 実吉智香子, 浪花愛子, 高橋廣行, 高木健太郎 (北大・FSC)
- P24 How to parameterize bacterial community in marine ecosystem model: a comparison of models with different complexity. Takeshi Miki (National Taiwan University)
- P25 川のメタ生態系モデル -国際河川メコン川のダム開発と環境保全-. 吉田勝彦(国立環境研・生物)
- P26 A learning parasitoid wasp switches two hosts: population oscillations, coexistence and transgenerational effects. 嶋田正和, 中山新一朗, 笹川幸治, 柴尾晴信 (東大・総合文化・広域)
- P27 Causes and consequences of cannibalism: a series of experiments using salamander larvae. Osamu Kishida (Hokkaido University, Field Science Center for Northern Biosphere)
- P28 孝行息子は性の負債を完済する: 性的対立における間接選択が性の維持に与える影響. 川津一隆 (龍谷大・理工)
- P29 環境中の CO2 濃度が寄主・捕食寄生者の個体群動態に与える影響: 種内競争様式で予測可能か? Effect of environmental CO2 concentration on host and parasitoid population dynamics: Is it predictable based on intraspecific competition type? Than Lin Aung, Midori Tuda(Graduate School of Bioresource and Bioenvironmental Sciences, Kyushu University)
- P30 長期の狩猟データを用いて階層ベイズモデルにより全国のシカの個体数を推定する. 松本崇, 岸本康誉, 坂田宏志 (兵庫県大・自然環境研)

日本とアメリカの進化学・生態学の研究、どう違うか？ デービッド・ヘンブリー (David H. Hembry)

京都大学生態学研究センター
hembry@ecology.kyoto-u.ac.jp

私は、アメリカから日本に来て、現在京都大学生態学研究センターでアメリカの国立科学財団 (National Science Foundation; NSF) のサポートによってポスドクをしている。アメリカで育ち、学部も大学院はアメリカだったが、3回日本に留学したことがあり、自分が経験した日本とアメリカの進化学・生態学の違いについて詳しく書きたいと思っている。アメリカでは、三つの大学 (ハーバード大学、カリフォルニア大学サンタクルーズ校、カリフォルニア大学バークレー校) で研究を体験したことがあり、日本では京都大学に留学した。2003年から2005年まで、京都大学生態学研究センターで文部科学省の研究生として研究をし、ドクターコースの途中で日本学術振興会のサマープログラムで京大総合人間環境学部に短期留学し、そして2012年からまた京大生研でポスドクをしている。

去年、日本生態学会関東地区会によって東京で開催された「生態学者の研究留学」というシンポジウムに誘われた。その発表とそれについて基づいた文章 (ヘンブリー 2013) で、日米両国間の生態や進化の研究には、主に価値が認められる研究、および流行的な研究には違いはあるが、結果的には国を問わず研究という活動自体はあまり変わらない、という結論を下した。つまり、科学 (サイエンス) という活動は、あまり周りの文化から影響を受けない、ということである。これが科学の特徴なはずだと西洋人として考えている。千年前の世界で、中国、イスラム文明、そしてメソアメリカで哲学的に異なる根拠から生じるそれぞれの科学が存在するように、国によって科学が異なる世界でもないし、現在の科学というのは特定の文化的根拠から生じるものではない。宇宙人が存在したら、同じ物理学と化学を発見するはずである。科学にある文化が根拠として必要なのであれば、科学にならない。少なくとも、西

洋人の科学者がそう思っている。本当かどうかというのを判断するのが今の目的ではないが、少なくともアメリカから日本に来て、同じような哲学的な根拠を持つ科学の研究ができるという例を挙げたいだけである。

それ以来、日本で同僚研究者 (colleagues) と色々話した結果、科学が国を問わずに同じであっても、日本の大学で生態学・進化学の研究をすることは、アメリカの大学で研究をするのとは気持ち違うところがある、というのが分かってきた。日本の同僚研究者にはこのことについて興味を持ってくれえる方が多かったので、この文章で自分が経験した違いの具体的な話をしたい。ここでの目的は、批判ではなく、比較なのである。アメリカと日本の間には、非常に似ているところも多いし、共通な悪いことも良いこともある。日本の同僚によく言われる例を二つ挙げてみる。日本人の研究はつまらないものが多いとよく言われるが、実際にはアメリカでもつまらない研究がたくさんある。そのアメリカ人たちはあまりいいジャーナルに論文を出さないのだから、日本までは伝わって来ない。優秀なアメリカ人の研究者しか日本まで尋ねに来ない。もう一つは、日本の大学には変なルールがたくさんあるとよく言われる。日本で教員をした経験がないので言えることは限られているが、博士号を取ったカリフォルニア大学バークレー校では京都大学と同じぐらいややこしいルールがあった。

このエッセイの目的は、自分の経験と日米両国の同僚研究者との話によって、アメリカと日本との間の進化学・生態学の研究の違いについて論じることである。研究内容だけでなく、大学の学部の中での人間関係やキャリアのことも書く。ただし、私はまだポスドクで、自分の体験が限られているので、日本における研究助成や教員の活動については詳しくない。

そのため、このエッセイは、学部生・大学院生・ポスドクたちに焦点を当てるとする。

研究のキャリアはどういう過程・順番であるか？

まず、アメリカにはどのようなキャリアの進み方があるのであろうか？ 学部は、日本と同じように4年間である。そして日本と同じように、研究に興味を持つ学部生の多くはラボで研究体験をする。

学部生の研究体験の種類はおもに2つある。1つは卒業論文 (senior thesis) のための研究で、これは大学によって頻度が多かったり少なかったりする。その頻度の違いは大学や専門によって、卒業論文が必要とされる場合とされない場合があるからだ。もう1つは、どの大学でも多くの学部生が行っている大学院生・ポスドク・教官のプロジェクトのための実験、データ解析、そしてフィールド・アシスタントである。そのような学部生は、自分で研究する前に研究の体験をすることで、自分がやりたいことが分かるようになるだろうと考えている。その研究体験によってお金をもらうこともあるし、多くの場合は単位をもらう。あるラボに入り、やっていることがあまり好きじゃなければ、学期が終わったら新しいラボに入ることも少なくない。

学部生はラボをどうやって見つけるだろうか？ これも大学によって違う。授業を受けた教官のラボに入る学部生はもちろんたくさんいる。カリフォルニア大学バークレー校には、学部生募集のウェブサイトがある。就職ウェブサイトと同じように、学期ごとに、学部生に行ってもらいたい研究の説明文書が、希望する教官、ポスドク、大学院生によって張られている。興味を持つ学部生には連絡してもらい、インタビューしてから好む学部生を選ぶ、というプログラムである。参加する学部生は授業の単位をもらえる。

(詳しくは、Undergraduate Research Apprenticeship Program;
<http://research.berkeley.edu/urap/> にご参考

ください。) 無論、教官だけではなく、大学院生やポスドクが学部生を直接指導することがよくある。データをたくさん欲しい大学院生は、たくさん学部生を働かせて、大量のデータを取るという話を聞いたことがある。大学院生が就職活動する際にも、学部生の指導をした経験は有利な条件となる。

日本のほとんどの大学と違い、学部生が同じ研究室に進学する期待はほとんどない。学部も博士課程も同じ大学であるのがあまりよくないと考えられているので、学部生が教官に「同じ研究室に進学したい」と言えば、「ここに来るな」と言われることが多い。(申請しても、かならず落ちる大学もある。) これはなぜかという、どの大学でも強い分野とそんなに強くない分野があり、個人の知的発展のために、それぞれの大学で勉強することで、異なる perspective (視点) を見ることになり、自分の一番よいアイデアが思いつくようになると考えられているからだ。

アメリカでは、新卒一括採用という制度がない。学年がおおよそ5月から6月に終わり、新学年が8月から9月に始まる。学部と大学院の間に、一年から数年にかけて、別な活動をする人たちが少なくない。これは英語で「taking time off」(勉強を休む)と言われている。リサーチ・アシスタントをしたり、会社に勤めたり、海外に留学したり、ボランティア活動をしたりする。(私の場合は、もちろん、日本に留学した。) 勉強を休むというのは、長いドクターコースの前に、別な経験をすることで、大学院進学のための精神的準備と考えられている。Taking time off の期間の活動が大学院の研究と関係のあることも少なくない。たとえば、会社でプログラミングをした人たちは大学院で数理解析をするし、外国で行ってきた人たちはよくその国で博士課程のための野外調査をしたり、現地の研究者と共同研究を続けたりする。(私の場合はそうであった。)

それぞれの長さの期間を休んで、大学

院に入る傾向が、大学院生同士の社会構造に大きな影響を与える。大学院では、院生が他の院生の年齢をあまり気にしない。アメリカでは先輩・後輩の感覚があまりなく（日本語の意味で「先輩・後輩」に直接当たる英語もなく、以下で詳しくそれについて書いた）、「先輩」が同じ年か年上の場合も多いし、「先輩」が同じ年か年下の場合も多く、大体誰も他の人の年齢を詳しく知らないことが普通である。（私が日本から帰って、大学院に入学したら、24歳であった。同じ環境学科の同級生の平均年齢は29歳ぐらいであって、彼らが皆結婚したり子供を生んだりしていたことに気づいた時は、かなりびっくりした。しかし、こういうのはアメリカでは普通である。）

マスターコースを通過せずに、直接ドクターコースに入る大学院生が圧倒的多数である。ドクターコースはマスターにあたる内容が入っているの、長さが5年から7年間になる。これがおそらく日本のシステムとの大きな違いの1つであろう。修士課程に進む大学院生はもちろんいる。修士で就職したい人や、テーマを変えようと思っている人も結構いる。（海外で修士を取ってから、アメリカに行ってドクターコースに入る留学生もいる。）しかし、本当に研究に熱意を持つ学生は、修士課程に進まずに直接博士課程に入りなさいと教官に勧められる。というわけで、アメリカのD1は、日本のM1に当たる。アメリカのD6が、日本のD4に当たる。

入試制度も違う。大学院ごとに入試があるわけではなく、ほとんどの申請者がGRE (Graduate Record Examination) という試験を受ける。GREがニュージャージー州にある民間会社が勝手に作った試験で、どうやって必要になったか私にはよく分からない。いずれにしても、入学に必要とされていても、GRE点数はあまり大切でなくなってきた。（受けなくていい大学院が近年増えてきている。）大学院の入学に重要なのは、受け入れ教官になってほしい教官への連絡なのである。受け入れ教官とメールで研究のアイデアを打

ち合わせをし、研究室の訪問をしたりする学生が多い。訪問の時、教官なしで現在所属している学生と必ず話しもできる。申請書のエッセイや元の指導教官からの推薦状も重要だが、受け入れ教官との打ち合わせが一番大事である。

多くの大学院のドクターコースの場合、最初の1～2年間で論文を読んだり、授業を受けたりする。今までの文献を知らないと、面白いテーマが見つからない。教官からテーマを与えてもらっても、論文をたくさん読ませられる。授業は、手法（統計、解析方法）やセミナー（graduate reading seminars; 一緒に論文を読んでディスカッションをする毎週の授業）が最も多い。学年の始まりは9月からなので、次の年の夏まで計画を立てる時間はたくさんある。

過去の文献に詳しいのが日本との大きな違いのもう一つだと思う。英語を速く読むことは容易なので、過去論文を知らない言い訳ができないのである。日本の平均的なM1の学生は、アメリカの平均的なD1ほど速く論文が読めないし、4月からすぐに調査や実験を始めなくてはいけないので、指導教官の役割がすごく重要になる。アメリカの場合、D1は翌春まで時間的余裕があるのでたくさんの論文を読む時間がある。そのため院生は自分の研究計画により中心的な役割を果たすことができ、指導教官とより対等なディスカッションができるのである。

多くの大学では、2年目に博士号の要件の1つとして口答試験を課す。学生が4人の教官から1人ずつ20～30分質問され、それに答えるというフォーマットなのである。学生が博士課程での研究計画を発表する場合も多い。これに失敗した場合、翌年にまた受けられる。教官からのテーマが先に決まっているので、（教官の時間に合わせて）試験の前にディスカッションをしながら、読むべき論文や本を教えてもらう。この試験の準備のため、数ヶ月間、家やカフェで一生懸命論文を読む学生がたくさんいる。本格的に研究がはじまるのは、口答試験の後が

多い。口頭試験から卒業までの期間は、3年から5年かかる。そのためドクターコースは5年から7年かかることになる。

学生の支援は、一般的にTA（つまり、学部生に授業を教える）を行うことで学費と給料を支給する、または指導教官の科研費から学費と給料を支給することでなされる。ほとんどの院生は、NSFのGraduate Research Fellowship Program (GRFP; NSFのドクターコースの学振)に申請して、合格した学生は3年間の給料と学費を国からもらう。(留学生はGRFPに申請できないが、学部の前からアメリカに在留している外国人の院生は申請できる。)GRFPに採用される率の具体的なデータはないが、オバマ政権のはじめの頃に学振の数が倍に増やされていても、JSPSの学振より取りにくいという印象である。私費で学費を払うことはおそらく可能だが、私が聞いたことがない。

給料と学費に比べたら、学生の研究費の問題は難しい。日本のJSPSの学振と違い、NSFの学振では研究費は支給されない。教官の方は大学から研究費を支給されないの、NSFなどの機関からの科研費に頼っている。NSFの科研費というのは、特定なプロジェクトにしか使われないので、科研費を持っていてもあまり(別のテーマの研究をしている)学生を手伝えないこともある。ということで、学生がどんなにいい研究をしても、研究のお金がどこから来るかという問題がある。1つの解決策としては、科研費があれば、教官はそのプロジェクトに関する研究だけを学生にさせる。もう1つの解決策は、学生が自分でNSFや大学そして民間機関に、様々な小さな助成金(small grants)に申請することである。例えば、公立(州立)なカリフォルニア大学では、メキシコの研究者との共同研究のための助成金(UC MEXUS Program; ucmexus.ucr.edu)とカリフォルニア大の野外演習地区(UC Natural Reserves)での調査のための助成金(Mathias Grants; <http://nrs.ucop.edu/grants/mathias/>)がある。私立大学では大学由来の助成金が多い。ハーバード大の多くの大学院生が

Putnam Expedition Grants

(http://www.mcz.harvard.edu/grants_and_funding/putnam-expedition.html)に申請することで、様々な遠方の国で動物学の調査をしている。NSFからは、競争の激しいDoctoral Dissertation Improvement Grant (DDIG; 1万5千ドルで、かなり大きな助成金)とアジア太平洋での短期留学のためのEast Asia and Pacific Summer Institutes (EAPSI; JSPSのサマープログラムがその中に入っている)という助成金もある。最近、EAPSIだけでなく、海外での短期留学のグラントが増えてきている印象もある。多くの院生は、教官のお金と自分のお金を適当に合わせて研究をする。実を言うと、クレジットカードを使いすぎて困ることは少なくない。

大学院の目的としては、この期間が終了したら、大学院生が独立した研究者になっていることである。大学院生は時間を研究に好きなように使い、全てのことを指導教官に相談することはなくなり、ある意味で指導教官が考えていることを気にしなくなるはずである。博士を取った学生がいつまでも指導教官の「後輩」または「元の学生」ではなく、教官の「若い同僚」(つまり、若いけど、同じレベルの研究者)になるのが目的である。(これが理想であるが、相手は人間でもあるので、そんなにうまくいかないこともある。)国を問わず、学生・教官の関係が難しいことがよくあるが、日本ほど教官の力は強くない。日本では、若い研究者のキャリアのために、指導教官の意見が最も重要かもしれない。逆にアメリカでは、一旦博士を取得して卒業したら、自分の指導教官の力は比較的弱くなる。もちろん、教官が元の学生の研究成果を宣伝したり、共同研究で科研費の申請書やレビュー論文に誘ったり、輝かしい推薦状を書いたりしてあげられる。しかし、日本の場合ほど指導教官の力が同じ大学・他大学の教官に強く影響しないので、結局、若い研究者のキャリアにとっては、多くの研究者に評価される研究をした方が重要となる。(ポストを募集する場合、時々、年上の教官が委員会の他の人に自分のところを出た元学生に有利になるように圧力

をかけたたりするが、他の教官がオープンに反対意見や文句を言う。私が大学院生時代、教官に直接そういう話を聞かれたことがあった。）

ポスドクの支援の制度も日本とかなり違う。JSPSの学振に支援されるポスドクの数が比較的が多い日本と違い、NSFが支援する研究者の割合は非常に少ない。NSFは限られた目的（海外留学、生物と数理の総合的な研究、そして人口比に比べたら科学者の割合の少ない社会集団）のためにしか学振を出さないの、ほとんどのポスドクが別の方法で給料を獲得する。一部の大学が、大学のお金でポスドクを募集するが、全国的にはそのポストの数は少ない。一部のポスドクは海外に行って外国から学振を取り、その数が近年増えてきている（ヘンブリー 2013）。残りの若い研究者（つまり、ほとんどの若い研究者）は、どこかの教官のプロジェクトにポスドクとして雇われる。なぜ、こうなっているのかは私にはあまり良く分からないが、いずれにしても、非常に複雑で若い研究者にストレスをかける仕組みである。（日本みたいな制度があればいいであろう。）比較的よいポスドクを取るためには、同じ分野の教官複数と仲良くなったうえで、大学院の途中で論文を出し始めることが奨められる。

大学院の終わりかポスドクの時から、大学教官になりたがる研究者が就職活動を始める。知る限りでは、申請過程はあまり日本と違わないが、面接がかなり違う。アメリカの教官の就職面接はパブリックで、誰でもその面接での発表を聞きに行ける。（誰が誘われたかという情報もインターネットに載っている場合がほとんどなので、私が日本にいる間に、アメリカの友達の誰がどこで面接を受けてどこで就職したかをインターネットでスポーツと同じように見ることが出来る。）面接は1~2日間かかり、発表以外は、同じ大学のそれぞれの教官と個人的なミーティングがある。就職面接は緊張するが、一番大変なのが2日間のミーティングなのである、と先輩によく言われる。無論、全ての教官が自分の研究室を持つ。日本

のある大学のような教授・准教授・助教が同じ研究室の中にいることはない。

就職採用過程で大学院生が重要な役割を果たす。採用委員会の中には大学院生の代表は必ず1人いるし、多くの大学院生やポスドクが発表を聞きに行く。ポスドクでも大学院生でも候補者と個人的なミーティングを願うこともできる。カリフォルニア大学バークレー校では、教官なしで大学院生と候補者がお互いに見える環境が用意されるため、必ずランチが開催されていた。委員会のメンバーも、積極的に院生やポスドクから意見を求めるのが当然のことである。

英語で「先輩」、「同級生」、と「後輩」をどう言うか？

英語で日本の大学での経験について話をするとき、「先輩」と「後輩」に当たる英語がなく、非常に困る。日本の組織に非常に大切なこの概念が英語で表せないわけではないが、英語での説明が非常に長くなってしまふ。たとえば、「先輩」は「people who are senior to you」と説明したら分かりやすく見えるが、「senior」という形容詞はちょっとあいまいな上、組織に入った順番も表せないため、「people who are older than you, or who entered the organization/lab before you did」のような説明になってしまう。そう言っても、その説明では日本にある先輩と後輩の間の関係をあまり表せない。意味的には、「superior」という単語があるけれど、この言葉はフォーマルな力の関係を表す（例えば、D3がD1の「superior」でありえない）だけでなく、軍事的・会社会的な意味なので、大学の場合には使われていない。（後輩の場合、「people who are junior to you」または「people who are younger than you, or entered the organization/lab after you did」になる。）私の妻はアメリカ人で日本語をあまり話せないが、以上の理由で英語で話すとき、「senpai」と「kohai」をそのまま英単語として使っている。

こう定義しても、アメリカ人には具体的に分からない。無論、アメリカでは年

年齢やキャリアの段階を表す英単語がたくさんあり、皆が完全に平等で同じ責任と役割を持つわけではない。しかし、年齢や順番によって自分の上に誰がいるかと下に誰がいるかという感覚があまりないし、上と下の人に対する話し方や態度が日本ほど極端に違わない。先輩からの依頼が後輩からの依頼より必ず大切なわけでもない。指導教官が何かを望んだら、直接言うだろう、と思っているので、学生が指導教官の本音を推測するのにあまり気を使わない。学生が教官をファーストネームで呼ぶ。英語で話すとき、「She was my labmate」(同時に同じ研究室にいた)または「We overlapped at Michigan」(同じ時にミシガン大にいた)と言い、先輩・後輩の関係を表せない。この理由で、私が初めて日本に留学したとき、「先輩」と「後輩」という言葉が自然に使えるまでは、すごく時間がかかった。普通に使えるようになるには、周りの人との関係に関する考え方を完全に変えなくてはいけなかったのである。

アメリカで上の人に学生が尊敬されるには、自分をもっと年上であるかのように自信を持って行動したらよいと言われる。年上の大学院生がポスドクのように行動したり、ポスドクが若い教官のように行動したりすることがよくある。一方で、人はやはり人なので、優秀な学生が自信を持つことを教官が嫌がることは少なくない。しかし、自分の指導教官からの尊敬よりも、むしろ周囲の研究者(特に他の教官)からの尊敬が重要なのである。大学院の目的は教官の同僚を作ることなので、博士を取ったら、いつまでも昔の指導教官やコロキウムの委員の後輩であるわけではない。パークレーに帰るとき、昔知っていた教官と一緒にコーヒーかビールを飲みに行き、どちらかという、友達になったような雰囲気である。

多様性の受け入れと促進

アメリカは非常に多様な国なのだが、アメリカで開催された学会大会に参加した方々がおそらく気づいたように、大学

の中の研究の社会は周りの社会ほど多様ではない。研究者の中では、男性が女性より多いし、ほとんどの研究者が白人かアジア系で、そしてゲイであることを秘密にしている研究者もまだ少なくない。

(ある分野では、学生の中で男女比率がほぼ同じだが、ポスドクと教官になると、男性の方が多くなる。)女性、黒人、ヒスパニック系の人たちや先住民が研究者に占める割合は、その周りの人口比に比べたら相対的に少ない。

ある社会集団の人たちの人口比が科学者の中に反映されていないことは、いくつかの原因がある。アメリカの社会が経済的に非常に不平等なので、平均的に貧しい人たちは機会が少なく、大学院まで進む確率が低い。今の教授の世代はもっと差別が強かったので、タイムラグの効果もあるであろう。しかし、差別的な行動がまだ多いということが認識され、その結果、研究を始めてもやめることになる。多くの場合、「皆平等であって差別しないよ」と思っている人たちが、無意識に差別的な行動をしているのである。

この結果で、差別に反対し、多様性を受け入れるためにはどうしたらいいかというのが非常に活発な話題になっている。毎日フェイスブックにログインするとき、アメリカ人の友達が張ったこの件についての記事を見るし、アメリカにいるときも、よく友達からこの話を聞いた。NSFも、アメリカのサイエンスの中の多様性の促進を1つの目的にしている。各科研費の申請書の中で、「Broader Impacts」という欄がある。「Broader Impacts」を日本語にしたら、「分野や社会への利益と影響」に近い意味が含まれている。研究者同士の国際交流を促進したり、このような文章を書いたり、自然保護や技術の開発に役に立ったり、他の研究者のためデータベースやソフトを作ったり、または研究室で人口比に反映されていない社会集団の人たちのために機会を積極的に与えたりすることが、いくつかの例である。白人の男性だけに機会を与えるのがよくないわけである。違う風に言えば、研究をしながら昔の差別的な制度を(無意識

でも)維持してはいけないのである。女性が子供を産んでから研究に戻れるように、大学もNSFも認識をどんどん高めることで、方針を変えたりしている。

日本でも性差別に対する方針、ハラスメント、そして人権問題に関する話をたくさん聞いたことがあるが、印象としては多様性の受け入れはアメリカほど認識されていない。日本はアメリカほど多様ではない、または歴史が違うとは言われるかもしれないが、日米を問わず、女性とゲイな人の比率が異なるわけでもない。日本の大学では、コリアンや部落の人たちもいないわけでもない。海外からの研究者も自分なりに日本の科学の多様性を高めるべきだろう。

最後に、国を問わず、研究は楽しいことが多いけど、大変なことも多い。大学院では多くの学生がメンタルヘルスの心配があり、それについてどうしたらよいかということが話題になっている。個人的な意見としては、この問題はあまりアメリカではオープンに認識されていない。頭のよい人にとっては、精神面で問題があるのは恥ずかしくて自分では認められない場合が多いであろう。しかし、解決方法を調べている大学もある。例えば、カリフォルニア大バークレー校では、学生の健康保険の中でメンタルヘルスの保険も含まれていて、多くの大学院生が利用している。(アメリカは国保みたいな公立健康保険がないので、大学院生の保険は大学がかける。)日本の場合はどのようになっているのかはよく分からないので、残念ながら比較はできない。

どういう研究をするか？

主に、アメリカと日本では大学での文化や制度がかなり違うけれど、研究の内容は似ている。しかし、自分の経験に基づくと、研究の大きな違いは以下の2つであろうかと思う。この中で近年の分野の変化が見られ、それについて英語でブログ・ポストを書いたことがある(Hembry 2012)。

研究テーマの流行:アメリカ人の研究者の考え方では、テーマが面白ければ、それがたくさんの研究者に研究されることは当然のことである。その上、研究材料を選ぶときは、たくさん知られば知られるほどよい材料だと考える人が多い。その結果、アメリカにはたくさんの人が研究している人気の系と、少数の人しか研究していない不人気の系がある。一方で、日本ではアメリカで少数の人しか研究していない系が比較的が多いという印象がある。(日本が熱帯林で、アメリカが温帯林だと言えばいいであろう。)無論、例外がある。異なる分野との間のコネクションを見つけられる研究者は尊敬されるため、若い研究者は他の人が興味を持ちそうな研究テーマを探すことになる。

流行の動態も激しい。村上春樹が「やがて哀しき外国語」の中で日本のポピュラー・カルチャーについて書いたように、焼畑農業みたいな傾向もある。毎年アメリカ進化学会大会(Evolution meetings)に行くとき、「ああ、アレが今年のブームか。なるほど」と思うことが多い。これが特に進化学の特徴だと思うが、最近の2つの流行は、多様化解析(diversification analyses または macroevolution)と「野外モデル生物」(“field model organisms”; Hembry 2012)である。アノールトカゲ(*Anolis*)やトゲウオ(stickleback)などの「野外モデル生物」の研究をしている人数がものすごく近年で増えてきた。逆に、過去の知見があまりない新しい研究系が発展しにくいことがある。インパクトのある研究をするなら、たくさんのデータがすでにある材料がいい、と学生によく言われている。

共同研究への強調:皆が同じことを研究するならば、どうやってコンフリクトを解決するのであろう？ 私の印象としては、共同研究はアメリカの方が多い。これはなぜであろうか？

もともとは文化的にアメリカ人にとって共同作業は人気があったのかもしれない。前述したように、日本みたいな先輩・後輩関係がなく、下の人が上の人に必ず

同意させる圧力が一般に感じられないので、オープンなディスカッションと平等的な共同研究がやりやすいのであろう。

(逆に、日本の場合は、先輩・後輩関係の中で、1人単独で研究をすることが一番安心かもしれない。) 直接聞いたら、多くのアメリカ人が、共同プロジェクトの方が楽しいし、生産率が高くなると思うだろう。最後に、1つの研究系を深く追求するよりも、物事間のコネクションを見つける方が尊敬される。若いときから、そういう研究を目指す研究者が多く、そのためには、一部の研究が共同で行われる必要がある。就職面接では、「うちの学部の中で、誰と共同研究をしたいですか?」と聞かれることがよくある。

近年、共同研究を促進する原因が増えてきた。1つとしては、90年代以来のNSFによる総合解析研究所の設立である。1995年、NSFがカリフォルニア州サンタババラ市でNational Center for Ecological Analysis and Synthesis (NCEAS; エンシース; nceas.ucsb.edu) を設立した。NCEASにはお金がたくさんあったが、実験室がまったくなかった。その代わりに、NCEASが研究集会の会場と参加者の旅行費・滞在費、そして集会の会計やプランニングを提供した。集会の目的は、新しいデータを取らずに総合的な解析をしたり、レビュー論文をかいたり、またはデータベースを作ったりすることであった。同じようにNCEASがショートコース(短期授業)の助成と会場を提供し、総合的な研究のためのポストドクの学振を毎年募集していた。1995年から2012年まで、(留学生を含めて)1世代の若い研究者がNCEASでポストドクをし、アメリカの生態学に強い影響を及ぼした。同じように2000年以降、ノースカロライナ州にNational Evolutionary Synthesis Center

(NESCent; ネッセント; nescent.org) やテネシー州にNational Institute for Mathematical and Biological Synthesis (NIMBioS; ニンバス; nimbios.org) がNSFによって設立された。

しかし、共同研究の促進には、総合解析研究所の存在より、NSFからの科研費が近年どんどん取りにくくなったことが重要であろう。研究者が共同で科研費に申請することは少しでも採用率を上げるだろうし、NSFも限られた予算がうまく使われることを望んでいるので、共同プロポーザルが有利となるからである。

終わりに

以上はあまりまとめていないような印象かもしれないが、次の2点で役に立つことを望む。1つは、アメリカ(または他の英語圏の国)に留学したい日本人の研究者にとって参考になること。2つめは、来日する欧米人研究者の以前の経験を知ること、コミュニケーションとお互いの文化の理解がとりやすくなることである。

引用文献

- Hembry, D. 2012. What's changed in evolution and ecology since I started my Ph.D. Guest post for *Nothing in Biology Makes Sense!* Online at <http://nothinginbiology.org/2012/06/19/whats-changed-in-evolution-and-ecology-since-i-started-my-ph-d/>
- ヘンブリー デービッド, 2013, 「進化生態学のためアメリカから日本に来て学んだこと」日本生態学会関東地区会報 61: 11-14.

研究室紹介 龍谷大学理工学部 近藤研究室 近藤倫生

6月の半ばになって大阪府立大の石原さんからメールが届いた。「個体群生態学会誌に掲載する研究室紹介の原稿の進み具合はいかがでしょう？」に始まる、極めて簡潔かつ逆立ちしても誤解しようのない明瞭な催促に冷や汗をかきつつ過去のメールをいそいで読み返すと、確かに2月に原稿依頼を受け、二つ返事で「書けます」と請け合っている。原稿締め切りは5月半ばということであつたらしい。

参考のために送っていただいていた過去の「研究室紹介」シリーズを読んでもみると、どうやら大学院生がそれぞれの研究室の雰囲気だとか先生の人柄などをフレンドリーな筆致で紹介するというスタイルのようだが、このタイミングで学生に原稿依頼するというのもひどい話なので、自分で書き始めている。せつかくの学生評を読む機会を失うようで残念な気もするが、「文は人なり」であるならば、研究室の雰囲気を伝えるために研究室主催者本人が研究室紹介を書くというのもそれほど悪いことではないだろう。（そして、すでにこの2段落でもう僕の「人となり」の内でも決して自慢できない一面が文面ににじみだしてしまったというわけだ。）

さて。龍谷大学の歴史は古く、その起源は1639年につくされた西本願寺の「学寮」にある。空海がひらいた綜芸種智院（829年設置・現、種智院大）には遠く及ばないものの、370年も続く学校というとかなり珍しい部類に入ると思う。理工学部はそのなかでは比較的新しい学部で、おおよそ20年前、1989年に創設された。日本における数理生態学の一創始者として有名な寺本英先生やカオス研究の山口昌也先生も京大を退官後、理工学部の創設にご尽力され教鞭をとられたと聞く。他にも僕の大学院時代の指導教官の一人だった東正彦さんも、京大に移られる前は龍谷大にいらしたとうかがった。現在でも、数理情報学科の森田善久さん

など、応用数学になじみの深い先生が多数おられて、数理生態学に強い関わりをもつ学部と言えるかもしれない。

私の所属する環境ソリューション工学科は、開設されて10年足らずなので大学の中ではいわば「新参者」だ。14名の教員のうち半数の7名が生態学を、残りの半数が都市・環境工学を専門にしている。「生態学についての深い理解を基盤におき、さらに理工学の専門的な知識を活かすことにより、環境の保全と持続可能な社会の構築に貢献する人材を育成すること」が学科のミッションである。生態学関連分野は多様な分野の研究者で構成されていて、淡水魚に強い丸山敦さんとか、ホタル等の昆虫や魚類研究で知られる遊磨正秀さん、環境DNAの山中裕樹さん、植物生理生態のTom Leiさん、シカ防除研究で有名な横田岳人さん、森林生態の宮浦富保さんなどが所属している。

近藤研究室は、いちおう理論群集生態学の研究室を標榜している。いちおうと書いたのは、私自身や学生の興味が広いため、さまざまな実データ解析や「ほんとうに生きている生物」を使った実験・フィールド調査等に基づく実証研究も視野に入っているためである。2014年7月時点では、私のほかに、ポスドクとして川津隆一さん・潮雅之さん、博士後期課程に高嶋あやかさんが所属しているほか、秘書さんにも来ていただいている。これまでも東北大から加藤聡史さんが来たり、いま島根大におられる舞木昭彦さんが所属していたり、面白いたくさんのメンバーに恵まれた。今年度は私のサバティカル中ということがあって学部生（卒論生）はいないが、例年だいたい1学年につき8名程度、3・4回生合わせると15名くらいの学部生がいて、たいへんにぎやかである。本当に。わらっちゃうくらい。

研究課題の話をする前に研究の「指導」

方針について紹介したい。研究指導はとも難しい。研究には「自己表現」の側面があるのがその理由のひとつである。生態学に限らず自然科学には客観的に判断できるやり方で、この世界に関する秘密をあきらかにすると言う目的がある。しかし、同時に「私には世界はこういう風に見えるんだよ」とか、「こんなやりかたでアプローチしたのだけどう？」なんて、私自身のありようを体現してみせる喜びというものも間違いなくあるように思う。そこに、その人らしきとか、オリジナリティとか、新規性というのが現れてくるのが理想であって、これが研究としての意義と一致したとき、研究生活というのは喜びにあふれたものになる。だから、研究「指導」は手取り足取りであってはいけないというのが持論だ。しかし、これは放置するというのとは違う。手取り足取りでもなく、放置でもない指導の、僕にとってのお手本は大学院時代を過ごした京都大学生態学研究センターの東・山村理論生態学グループだ。これについて、去年の夏頃、九州大の矢原先生に「学生が無茶な研究計画を立てていたらどうすべきか」という問いかけをいただいて Face Book 上に書いた記事がある。その文章を下敷きに、理想的な研究室運営についてここで記しておきたい。

びっくりするような研究成果というのは、意外なところから出てくる。あんまり人が手を付けない（でも自分は気になる）ところを、こだわって突き詰めていくと出てくる感じだろうか。だから、きっと人が見たら「こいつ、なんでこんなことにこだわってるんだろう」と思われるに違いない。逆に言うと、その人だからこそこだわられる課題に取り組んだとき、本当に独創的な研究ができるのだろう。でも僕は、自分の学生がそんな課題に取り組んだ時、これは重要だと判断できる自信がない。だから、「なんじゃこりゃ」という課題に取り組む学生がいても（基本的には）そのままさせておくだらう。もちろん、明らかな知識不足や論理・研究計画の破綻は指摘するけれども。

ただ、意外な結果を生むと思われた研究

の多くは失敗する。すでに職を得ている人なら多少失敗したって、その後数年の研究費を得られないくらいですむが、職を求めている研究者にとってはそうはいかない。夢が破れ、生計が破綻してしまう。だから、必ず「なんとかかなりそうな課題」がその研究過程に埋め込まれるように注意・忠告する（言うは易し、ですが）。たとえば、その分野のレビューは論文になるし、主課題に取り組む中で出てくる小課題にも論文になるものはある。これを保険にしながら、なんとか本当にやりたいことをやってもらおうイメージだろうか。このバランス感覚を学んでもらうことは、研究者になりたい学生にとっては、職業研究者になってやっていくためにも重要な訓練だと考えている。

でも多くの学生にとって本当の敵は、他人に理解してもらえないことではなくて、「明らかな知識不足や論理の破綻」に気づかないことかもしれない。僕の大学院時代の理論生態グループの同僚はわりにみんな研究者として生き残って成功している。大学院ではほんとうに好きなようにやらせてもらったのに、これはなかなかすごいことだ。なにがよかったのかなあとたまに考えるが、若い大学院生がせまい部屋に四六時中いっしょに過ごして、ああでもないこうでもない朝から晩まで徹底的に議論したのが一番大事だったような気がしている。事実、ダメそうな研究課題がダメそうに見える理由の多くは「高過ぎる独創性」のせいではなくて、「明らかな知識不足や論理の破綻」じゃないだろうか。これに気がつくのに最適な方法は徹底的で批判的な議論だ。自由に互いを批判し、アドバイスし、議論できる環境を作ってあげるのは「指導」教員のもっとも重要な仕事だと思う。

僕自身の研究課題について最後に少しだけ。この10年くらいの間は食物網を始めとする種間相互作用ネットワークの構造とか、それが個体群動態・生物群集の存続性におよぼす影響に関して研究を進めてきた。この分野では、適応的採餌に基づく食物網の柔軟性が多種共存に及ぼす影響 (Kondoh 2003, Science 337:

349) や種間相互作用タイプの多様性が生物群集維持に果たす役割 (Mougi & Kondoh 2012, Science)、食物網におけるネスト構造の発見 (Kondoh et al. 2010, Ecology 91: 3123)、カリブ海食物網における IGP モジュールの維持機構 (Kondoh 2008, PNAS 105: 16631) など、論文数は決して多くないものの、自分なりのアイデアをいくつか提示できたと思う。むこう 5 年程度は主に二つの分野に注力したい。一つは、群集生態学と生態系生態学をつなげること。もうひとつは、安定同位体分析や環境 DNA などの新しい技術を基盤とした群集生態学の

枠組みを作ることである。どちらも、先行研究に乏しく、私達の目前には広大な未開拓の荒地が広がっている状態だ。その先に宝の山が潜んでいるのか、あるいはどこまで行っても砂漠が続いていていずれ行き倒れることになるかは今の時点ではわからない。しかし、荒地の「場所」はわかっている。僕と一緒に、自由な発想力でこれに立ち向かってくれる若い方を探している。私こそはと思う方、研究室の扉をたたいてくれたらと思う。プログラミングや数学が得意じゃなくても、なにか得意なことや特徴がひとつあればそれで十分。待っています。



近藤研究室の一コマ卒業式の記念撮影。学部生が多いので、毎年、研究室メンバーがどんどん変わります。数えてみたらこの 8 年ほどで卒業生は 60 名にも上ることがわかりました。

研究室紹介 信州大学学術研究院理学系・浅見研究室 高橋美樹

信州大学はキャンパスが五つあります(伊那・上田・長野・松本市)。浅見崇比呂さんの研究室は松本市にあります。学術研究院とは教員組織の名前で、学生が在籍するのは、総合工学系研究科(博士)、理工学系研究科(修士)、理学部・生物科学科です。

研究室が教員の組織(講座)にはなっていません。アメリカ式だそうで、教員の間にはヒエラルキーがなく各自の研究室が並列しています。だから研究室を教員の名前でよぶのであることを、最近知りました。ドイツ式の講座のように専攻分野でよぶなら進化生物学研究室でしょう。(進化は生物学すべてに共通だから分野にはならないとなれば)テーマが生態・遺伝・行動・発生・系統・分類と多岐にわたるので、浅見研とよぶのがよさそうです。

研究室の紹介として、インターネットではわかりそうにないことをお話します。アカデミックでない情報が多くなりますがご容赦ください。

ここだけの話

生物科学科の学生は「浅見さん」とよびます。本学の伝統とかではなく、新入生歓迎会での浅見さんの一言で広まりました。「○○先生ってよぶのは、こけにするときだった。」

カタツムリで知られますが、動植物、陸海にかかわらず、家族そろってともかくも採る・飼うのが好きです。どこだろうが出張先には「一式」をもちあるき、採れる生き物はなんでも持ち帰ろうとするのにはあきれます。世界最大の松かさ(4 kg, *Pinus coulteri*, カリフォルニア)は落ちる前にリスにかじられ、たとえ無傷でも落ちた面が腐食する・・・左右対称のきれいな完品を採るのは *lifetime dream* の一つだったそうです。実物をみたらわかる気がしました。本人は口にしないので(なぜ展翅板・殺虫管が山のようにあるのか)関連の実態を知る人はたぶん多くありま

せん。

写真撮影やスケッチは、寝食わすれるので恐くなりカメラにふれないようにしているそうです。その昔の豪華房・生物写真コンクールは入賞6回のマニアとか。若かりし頃のスケッチを見た学生はきまって「マジかよ!」。一見に値します。だからではないと思いますが、科学は芸術だと口にします。無脊椎動物の、精巧なクラフト(彫刻とかおもちゃ)に目がありません。いわく「正しい」造形のカタツムリグッズが研究室にあふれています。みなさん圧倒され、貝殻コレクターだと思いがちですが、その類ではなさそうです。

午後8時をすぎるとよくいなくなります。40代まで25mしか泳げなかったそうで、体調管理に1kmだけ市営プールで泳いでいます。同年代の教員ではひとりだけ、年2回学科ソフトボール大会の(戦力外)常連です。

いくら飲んでも平然なので、ここまでを本人から聞きとるにはたくさんの飲み会が必要でした。新入りには不可思議なことが多く、さらなる研究が望まれます。

特色1. 国際力

わたしの知る3年間には、タイ、中国、ハンガリー、マレーシア、バングラデシュからの、何人もの研究者(教員、ポスドク、大学院生)が所属・滞在しています。「少なくとも半分が外国人、理想は日本人が少数派」を、浅見さんはめざしているそうです。外国人が多いのは、こうした国々で長期生態調査や共同研究を進めているからでもあります。調査先には、国名でベトナム、ドイツ、インドネシア、イタリア、ルーマニア、ロシアが加わります。

セミナー・授業はもちろんですが、日常の外国人との対話を聞いていると、浅見さんは自分の体験を話題にすることがあまりありません。たいていは第

三者の視点から、学問の興味や疑問を縦横無尽にひろげます。学食でのわずかな時間に、研究の中身から背景をへて歴史・地理・経済・芸術・言語・教育から生き物へと話題がひろがります。授業・ 세미나ではないこの時間の価値に、ながらく気がつきませんでした。留学先や懇親会で英語を使いたくて苦勞して、やっとそれがわかるようになりました。

浅見さんは英語で食べるほうが解放されて楽しいのではないか、そんな気がする 때가 あります。浅見語録の一つ「選んで日本人になったわけじゃない」とかが関係するのかどうか、深層（真相）は解明できていません。

特色 2. セミナ力

論文セミナー (Journal Circle) では、自分の研究で引用することになる専門誌の文献ではなく、一流の総合誌に最近発表された論文をまな板にのせることになっています。視覚的に解きほぐした配布資料をつくります。どちらも若手の学生には難関で、やり直しがよくあります。論文は画期的なだけでなく、論理の欠陥や英語の間違いも多々みつかることが、くりかえすうちにわかってきました。英語でしゃべることは優先事項にはなく、ほとんどは浅見さんやポスドクが外国人向けに仲介してくれます。若手の学生もしだいに日本語と英語をまぜこぜにするようになります。浅見さんはそれでいいと言っています。

Colloquium とよぶセミナーに向け、各自が課題にとりくみます。日常のハウレンソウ（報告・連絡・相談）をもとに、各自が仕事（調査実験・学会発表・投稿原稿・就活）の実況カルテをつくります。しんどいがタメになると先輩から聞いています。当日は、各自の計画に時間を割きます。浅見語録「変更できる計画をたてる」。4月に学科恒例の、ポスドク・学生のポスター発表「研究計画検討会」は、浅見さんが赴任直後にはじめたのだそうです。

特色 3. 発表・文章力

浅見さんの講義は、体系立てた中身を何通りもの「わかる日本語」で話すことで知られています。最近わかったのですが、講義の前は研究室の照明が消え、鍵がかかります。居留守で準備の時間だそうです。後期はすべて英語なのにわかりやすい（と感じる）のはそのためかもしれません。

中身が大事だと浅見さんは念を押しますが、セミナー発表から投稿・応募・就活まで、言語をどのように使えばわかりやすくなるか、それを容赦なく伝授されます。世間ではあまり聞かないコツをもっているようにみえます。どのようにして体得したのか、まだわかりませんが興味あるところです。

表情報

カタツムリに限って研究対象にしているわけではありません。たとえばポスドクの氏家由利香さんは、有孔虫（海の原生動物）を使い、細胞の左右性の進化・分子系統地理・種分化の研究をしています。このほかに、有肺類の左右性、種分化・生殖的隔離、およびカタツムリダニ宿主特異性に着目したプロジェクトで、世界から世界へ羽ばたくポスドクを募集中です。

1. 樹上性カタツムリの左右二型共存機構 このグループには、発生の左右が反転した二型が共存しています。左右相称動物に例外の事象です。この共存機構を解明する長期生態研究を東南アジアで行っています。交尾行動に大きな秘訣のあることがわかりつつあり、赤外線微速度撮影で行動解析をしています。

2. 左右極性の量的変異と進化 らせん卵割の左右反転をよく調べると、反転の度合に遺伝分散が有意にあることがわかります。左右反転が有利な環境では、左右逆の卵割が選抜され、左右極性が量的に進化すると予測されます。他の動物では、内臓逆位が外部形態とは無関係なため有利になることがなく純化淘汰されるため、系統進化しないと考えられます。この動物界の進

化ルールを律する発生生態進化のメカニズムを実証するのが目的です。

3. 交尾前隔離機構 カタツムリの種間の選択的交尾は、視覚・触覚でなく揮発性の性フェロモンによることが行動実験によりあきらかです。ところが、有肺類では、性フェロモンの化学分析は先行研究がありません。世界で唯一の実験モデル系（コハクオナジマイマイとオナジマイマイ）をつかい、性フェロモン分子を同定、その進化機構を追究しています。

4. 交尾中隔離機構 交尾をするときにだけ体外に露出する陰茎内壁の微細構造は、昔から種の分類に有用である

ことがわかっていました。なぜ陰茎内壁は、進化率が高いのか、この問題を追究した先行研究は皆無です。日本に固有の近縁種群をつかい、この陰茎内壁の構造が、交尾前でも交尾後でもなく、交尾中の相手の認識・識別に寄与するメカニズムを研究しています。

5. 単一遺伝子による種分化 同時雌雄同体なのに、同時に精包を交換するグループと、雌雄二役にわかれて一方に精包を授受するグループとがくり返し進化しました。どちらのグループでも、発生の左右を反転する遺伝子が種分化遺伝子として機能することを、イタリア、ルーマニア、中国、ベトナム、ロシアで検証しています。





書評

Trait-Mediated Indirect Interactions: Ecological and Evolutionary Perspectives Edited by Takayuki Ohgushi, Oswald Schmitz and Robert D. Holt (2012) Cambridge University Press

本書は最近の形質介在型の間接相互作用についての研究を集大成したものである。編集者の筆頭は個体群生態学会の重鎮であり、国内・国外でこの分野を牽引してきた大串隆之氏である。執筆者の中には、Oswald Schmitz、Timothy P. Craig、Mark D. Hunter、Thomas G. Whitham、Robert D. Holt などこの分野で著名な研究者達が名前を連ねていて、この1冊によって最近の間接相互作用研究の全てをカバーできると言っても過言ではないだろう。評者自身も大串氏のもとでこの分野の研究を行ってきたこともあり、その発展の過程を垣間見てきた。そのため、その成果がこのような書籍となったことをひじょうに嬉しく思う。

複雑なものを理解するには、その中から個々の部分を取り出して、そのメカニズムや要因を明らかにしていくという方法が従来から取られていた。しかし、それだけでは、相互に関連する複数の要因が合わさって全体としてなんらかの性質を見せるような系を理解することはできない。それは生物群集でも同じと言える。生物群集を構成する最もシンプルな系が2者系であるが、生物群集の研究においても直接出会う2種間の相互作用だけに焦点をあてた研究が従来は主流であった。そのような研究によって生態学が発展したことも確かである。共生関係、種間競争とニッチ、捕食-被食関係といった生物間相互作用についての知識は、個体群生態学の核となる部分でもある。一方で、2者系だけに注目してただけでは、生物群集全体を理解することに限界があったことも確かである。そのことは Paine (1966)が行った古典的な研究が既に示していた。岩礁潮間帯の生物群集における最上位の捕食者であるヒトデは競争力の強い種(イガイ)の数を減らすことで、それらの種が岩の表面を独占することを防ぎ、競争能力に劣った種の共存を可能にしていたのである。このような種の中にはヒトデと直接に関係のないカイメン

やイソギンチャクも含まれていた。見かけ上は相互作用が働かない生物種の間にも、他の生物種を介して間接的な相互作用が働いていたのである。2者系だけに注目していたのでは、ヒトデのようなキーストン種の重要性や間接相互作用のことはわからなかったはずである。群集生態学者が3者以上の生物種の相互作用に注目することの重要性を再認識したことで、近年、生物間相互作用についての研究がおおいに進み、生物群集における間接相互作用の重要性を我々は知ることとなったのである。

Paine (1966)が示した間接相互作用は個体数の増減を介したものであることから、密度介在型の間接相互作用

(density-mediated indirect interaction) と呼ばれている。初期の間接相互作用の研究は主にこの密度介在型が対象であったが、1990年代初期頃から形態や行動あるいは質などの変化による形質介在型の間接相互作用 (trait-mediated indirect interaction) が注目され始めた。密度介在型の間接相互作用は捕食や競争などによる個体の死亡を介して他の生物種に影響するが、形質介在型の場合は、個体が死なずに誘導防御反応などの形質の変化を起こすことで他の生物種に影響するというものである。大串氏の研究グループも、植食者の食害によって誘導された植物の形質変化が間接効果として他の生物種に影響を及ぼすことを明らかにしてきたのである。

さて、形質介在型の間接相互作用についての研究の背景についてはこの程度にして、肝心な本書の内容について紹介したい。本書のタイトルだけを見ると、形質介在型の間接相互作用だけに焦点を当てているように思えるが、必ずしもそうではない。密度介在型の間接相互作用についても十分に触れられている。生物群集において形質介在型と密度介在型の間接効果の大きさを相対的に比較することで、形質介在型の間接相互作用が密度介

在型よりも如何に大きな効果を持つかがわかるのである。よって本書は形質介在型と密度介在型の両方の間接相互作用を十分にカバーしていると言ってよいだろう。タイトルは生物群集により重要な効果を持つ形質介在型の間接相互作用の方を前面に押し出したものと考えられる。

本書は以下のような4部、27章からなる。

- Introduction
(1章、計5ページ)
- PART I COMMUNITY
(2~10章、計196ページ)
- PART II COEVOLUTION
(11~15章、計85ページ)
- PART III ECOSYSTEM
(16~21章、計138ページ)
- PART IV APPLIED ECOLOGY
(22~26章、計91ページ)
- Coda (27章、計4ページ)

IntroductionとCodaを除けば、各章は独立した論文となっていて、各著者たちの研究成果を中心としたレビューとなっている。各部の最初の章はPerspectiveとなっていて、そのパートの展望を述べているわけではあるが、執筆している著者らの研究についてもちゃっかり紹介されている。群集についてのPART Iが最も多くのページ数を割かれているが、これは形質介在型の間接相互作用が実に多様で、様々な系に見られることを反映しているからだと思われる。しかし基本的なところはどの場合でも共通していて、表現型可塑性によって形質の変化が生じることで、間接相互作用としての効果を他種に及ぼしていることがわかる。それに対し

て共進化についてのPART IIと応用についてのPART IVはページ数がPART Iの半分程度と少ないが、これはこれらの分野の研究がまだまだ少ないことを反映しているようだ。直接相互作用が共進化を引き起こすように、間接相互作用も共進化を引き起こすだろうが、研究しやすい系を見つけるのが難しそうだ。侵入生物種を対象にする、あるいは重要な生態的位置にいる生物種を欠いている生息地を見つけられるかがポイントと思われた。生物防除、外来種問題、地球温暖化など応用生態学的な問題を考える上でも、形質介在型の間接相互作用を考慮した研究が必要なことは実に納得できる。応用面でもこれからの研究の発展をおおいに期待したい。エコシステムについてのPART IIIは、遺伝子から生物群集さらに生態系機能をつなぐ研究アプローチなど実にスケールの大きさを感じた。遺伝子解析が技術的に容易になるほど、この分野もこれまで以上に注目されることは間違いないだろう。

以上のように本書は内容的に最近の間接相互作用研究のほとんどをカバーしている。形質介在型の間接相互作用は様々な系で普遍的に見られ、生態系機能としても重要な役割を果たしている。生物間相互作用を研究するのであれば、間接相互作用についての知識は不可欠である。ぜひ本書によって最近のこの分野における研究の発展について知ってもらいたい。

大阪府立大学大学院理学系研究科
石原 道博

事務局報告

内海俊介 (事務長)

●2013 年度第 2 回運営委員会報告

日時:2013 年 10 月 11 日(金) 15:00-18:00

場所:大阪府立大学

参加者:石原、瀧本、西田、吉田、佐藤、椿、齊藤、岸田、徳永(2014 年大会実行委員長)、谷川(PE 編集事務局)、内海
欠席者:巖佐、辻、近藤、粕谷、宮竹、仲岡、松浦、津田

1. 報告事項

(1) 事務局報告

・日本語ウェブサイトの運用開始、京都賞ワークショップ協賛、日本版 NIH に関する生科連声明への賛同、第 8 回奨励賞選考委員の委員長互選の結果、について報告された。

(2) PE 編集事務局(佐藤)

・順調な編集状況について報告された。

(3) 会報編集(石原)

・順調な編集状況について報告された。

(4) 2013 年度大阪大会(石原)

・開催状況について説明された。今年度第 1 回運営委員会で決められた通り、ウェブサイトでのキャンセルポリシーの提示、ポスター賞の学会長授与、奨励賞受賞者の参加費・懇親会費免除が実施された。

(5) 2014 年度つくば大会(徳永)

・10 月 10-13 日頃に筑波大学にて開催されることが報告された。実行委員体制について説明された。

2. 審議事項

(1) 法人化(齊藤)

・定款案と細則案について審議し、総会に提出する案が承認された。

(2) 総会議事

・総会議事次第が承認された。

(3) 2015 年度大会

・2015 年度大会の開催場所については継続審議となった。

●2013 年度個体群生態学会総会報告

日時:2012 年 10 月 12 日(日)17:00-18:20

場所:大阪府立大学

1:会長挨拶

2:事務局報告:内海事務長より、第 1 回および第 2 回の運営委員会議事について報告された。

3:PE 編集事務局報告:佐藤編集委員長より、編集・投稿状況などについて報告された。

4:会報編集報告:石原編集担当委員より、編集状況が報告された。

5:2014 年度大阪大会の案内:徳永会員より、10 月 10-13 日頃に筑波大学にて開催されることが案内された。

6:予算・決算関連

(1) 2012 年度決算(報告):運営委員会で承認された決算が報告された。

(2) 2013 年度予算(審議):予算案が、全員一致で承認された。

7:審議事項

(1) NPO 法人の定款案および細則案の審議を行い、以下の点を含む最終案が全員一致で承認された。

・国内正会員と永年会員をもって法人上の社員とし、海外在住者でも連絡先を国内におくことによって、国内正会員として社員になることができる。

・海外学生会員のカテゴリを新たに設ける。ウェブ購読のみとし、細則において年会費を国内の学生会員(ウェブ購読)と同額の 2,500 円と定める。

・賛助会員を個人及び団体とする。細則において、それぞれの年会費を 20,000 円と定める。

・総会の定足数について、社員総数の 2 分の 1 以上の出席には委任状の提出で足ること、電磁的方法(Eメール)による委任は認められること、電話のみによる委任は不可であること、が確認された。

・法人設立当初の役員が承認された。

・永年会員の資格について、「会員歴 30 年以上かつ 65 歳以上で、理事会によって

推薦された個人」として細則に定める。

●2014年度第1回個体群生態学会運営委員会兼第1回理事会報告

日時：2014年6月1日(日) 13:30-17:00

場所：北海道大学東京オフィス

参加者：石原、巖佐、近藤、佐藤、瀧本、津田、椿、仲岡、西田、松浦、宮竹、吉田、齊藤、内海、徳永(2014年度大会実行委員長)、岸田(ビデオ会議システム)
欠席者：辻

1：報告事項

(1) NPO 法人報告(齊藤会長)

・2014年3月26日にNPO法人登記が完了したことが報告された。

(2) 事務局(内海事務長)

・2013年度決算の監査が行われ適正なことが認められた。

(3) PE 編集(佐藤編集長)

・順調に編集が進んでいることが確認された。

・次期編集長(2015-)を、佐藤編集長が継続して務めることが確認された。

(4) 会報編集(石原編集長)

・次号の内容や編集状況が確認された。
・次期編集長(2015-)を、津田委員が引き継ぐことが確認された。

(5) 2014年度つくば大会(徳永大会実行委員長)

・10月10-12日に筑波大学で開催される大会について、実行委員体制、スケジュール、内容などが確認された。

(6) 2015年度大会(西田委員)

・西田委員を中心として彦根で開催される見込みであることについて確認された。

2：審議事項

(1) 事務局(内海事務長)

・2013年度決算が承認された(資料1)。

・2014年度予算が承認された(資料2)。

・2014年度若手科学者賞の推薦依頼があり、推薦する候補者について審議した。

・PEのEditorial Coordinatorの職務明細について明文化することが決まった。

・著作権協会より問い合わせのあった電子著作物の複製等に関する権利委託について審議した。Springerと相談してこの件を取り扱うことが決まった。

(3) 奨励賞(津田選考委員長)

・第8回奨励賞を横溝裕行会員に授与することが決まった。

・第9回奨励賞の告示について確認し、選考委員会の構成について審議した。

(4) 法人化(齊藤会長)

・今後の法人への移行と任意団体の解散に向けての手順とスケジュールについて確認した。

・法人の規則案について継続検討し、次回理事会にて審議することになった。

(5) その他

・学会メーリングリストシステムの改善について次回会議の課題とすることとなった。

・会員数について、および、これからの個体群生態学会の運営について議論が交わされ、継続的な議論の必要性が確認された。

資料1-1

2013年度個体群生態学会
収支決算報告書
(2013年4月1日～2014年3月31日)

一般会計

収入の部

単位:円

科 目	予 算 額	決 算 額	備 考
会費	1,992,995	1,870,500	国内正会員(一般) 1,345,000 国内正会員(一般オンライン) 399,500 国内正会員(学生) 66,000 国内正会員(学生オンライン) 45,000 国外正会員 15,000
会誌編集補助	1,251,000	1,390,000	
2013年度大会収入	2,000,000	1,085,000	
利子収入	200	220	
雑収入	50,000	51,767	学術著作権協会複写使用料
小計	5,294,195	4,397,487	
前年度繰越金	2,278,197	2,278,197	
合計	7,572,392	6,675,684	

支出の部

単位:円

科 目	予 算 額	決 算 額	備 考
会誌編集費	1,950,000	2,069,792	
会報印刷費	75,000	83,000	会報 No70
会報編集費	60,000	58,000	会報 No.70
事務委託費	635,000	574,375	土倉事務所
印刷・通信費	150,000	189,140	
事務長事務費	80,000	70,445	
旅費	300,000	385,226	運営委員会
2013年度大会支出	2,000,000	942,207	
生物科学学会連合会費	50,000	50,000	
法人化経費	500,000	186,204	ひかり行政書士法人
予備費	50,000	0	
小計	5,850,000	4,608,389	
次年度繰越金	1,722,392	2,067,295	
合計	7,572,392	6,675,684	

資料1-2

2013年度個体群生態学会

収支決算報告書

(2013年4月1日～2014年3月31日)

特別会計

収入の部

単位:円

科 目	予 算 額	決 算 額	備 考
利子収入	1,000	917	
小計	1,000	917	
前年度繰越金	5,761,274	5,761,274	
合計	5,762,274	5,762,191	

支出の部

単位:円

科 目	予 算 額	決 算 額	備 考
雑費	500	0	
一般会計に繰入	0	0	
小計	500	0	
次年度繰越金	5,761,774	5,762,191	
合計	5,762,274	5,762,191	

資料2-1

2014年度個体群生態学会
予算案

(2014年4月1日～2015年3月31日)

一般会計

収入の部

単位:円

科 目	予算額	備 考
会費	1,821,790	国内正会員(一般)169人×8000円×0.92 1,243,840 国内正会員(一般オンライン)61人×7500円×0.94 430,050 国内正会員(学生)27人×3000円×0.90 72,900 国内正会員(学生オンライン)26人×2500円×1.0 65,000 国外正会員 4人×5000円×0.5 10,000 2014年度予定人数と2013年度納入実績に基づく
会誌編集補助	1,390,000	
2014年度大会収入	1,500,000	
利子収入	200	
雑収入	50,000	学術著作権協会複写使用料
小計	4,761,990	
前年度繰越金	2,067,295	
合計	6,829,285	

支出の部

単位:円

科 目	予算額	備 考
会誌編集費	2,000,000	
会報印刷費	75,000	会報 No.71
会報編集費	60,000	会報 No.71
事務委託費	600,000	土倉事務所(業務委託・振込手数料など)
印刷・通信費	150,000	
選挙費	95,000	
事務長事務費	50,000	日本語ウェブサイト管理費含む
旅費	380,000	運営委員会
2014年度大会支出	1,500,000	
生物科学学会連合会費	50,000	
予備費	50,000	
小計	5,010,000	単年度収支(-248,010円)
次年度繰越金	1,819,285	
合計	6,829,285	

資料2-2

2014年度個体群生態学会

予算案

(2014年4月1日～2015年3月31日)

特別会計

収入の部

単位:円

科 目	予 算 額	備 考
利子収入	1,000	
小計	1,000	
前年度繰越金	5,762,191	
合計	5,763,191	

支出の部

単位:円

科 目	予 算 額	備 考
雑費	500	
一般会計に繰入	0	
小計	500	
次年度繰越金	5,762,691	
合計	5,763,191	

Population Ecology 編集報告

第 55 巻 (2013 年) は論文総数 52 本, 610 ページで発行しました. 第 56 巻 (2014 年) からはページ数を増やすことになっていますが, 編集および発行は順調に進んでおり, すでに 3 号までの入稿が完了しています. 4 号までの掲載論文総数は 59 本, 660 ページ程度になる予定です. 会員の皆さまのご協力に感謝します.

投稿状況

別表 (表 1) のように, 2013 年の投稿論文数の合計は 176 本 (うち特集論文は 6 本, 総説は 2 本) でした. これまでの最多の投稿数の記録を更新しました. 地域別に見ると, 欧州 (26.7%) および日本を除くアジア (26.1%) が顕著に多く, 北米 (18.2%) が日本 (11.4%) を上回りました. 国別投稿数の 1 位はアメリカの 27 本で, 前年 (29 本) なみです. 日本は, 前年には (18 本から) 27 本へと増加したのですが, 再び 20 本へと減少してしまいました. また前年と同様に, 投稿国の分散化が継続しています.

2014 年のこれまでの投稿数は 81 本です. これは, 一昨年同期の 73 本, 昨年同期の 77 本をやや上回っています. ただし, 今年度は特集論文が多く含まれています (11 本).

2013 年度の投稿論文の受理率は, 現時点では平均で 26.1% で, 前年同期の 32.3% よりも低い値でした. 最終的な受理率は, 2011 年が 36.7%, 2012 年が 37.6% となっています. この数値は地域による変異が高いのが特徴です. 日本からの論文の受理率は圧倒的に高く (50% 以上), 北米およびオセアニア, 欧州がそれに続いて平均以上, アジア (日本を除く), アフリカ, 中南米, 中東からの論文の受理率は低くなっています.

審査経過

2013 年に受け付けた論文のうち 68.2% (120 編) を 60 日以内に 1 回目の審査を終え, 著者にその結果を伝えました (図

1). 1 回目の審査日数の平均値は 45.2 日, 査読に回らず編集長, 副編集長, 担当編集委員の段階で棄却された原稿 (Editor reject) の割合は 40.3% でした. 2011 年の平均日数は 38.8 日, 2012 年のそれは 42.5 日でした. 2011 年度から「編集長 1 名 + 副編集長 7 人体制」で編集をおこなっていますが, メンバー入れ替えが若干ありましたので, その影響が数値の変化として現れているのかもしれませんが.

審査の迅速化には, 査読者の協力が不可欠です. ここ数年の, 担当編集委員からの査読依頼が断られてしまうケースが多いという傾向はあまり改善されておりません. これは, 結果的に審査日数の増加につながってしまいます. 著者の立場からは, 1 日も早く審査結果を知りたいものです. 審査日数の短縮のために, 査読を依頼された場合には, どうか引き受けていただきますようお願いいたします. また, 査読を担当された場合には, できるだけ早く審査結果をご報告ください.

特集

Population Ecology をより魅力的な雑誌にするために, 特集や総説を出版していく予定です. 昨年度より, 宮下直さんと瀧本岳さんのお二人には, special feature editor (associate editor) として編集部に加わっていただいています. 第 56 巻 (2014 年) には, 特集

「Mathematical Models for Effective Environmental Management」(編集: 横溝裕行さん・瀧本岳さん) が出版されています.

特集の提案は随時受け付けており, その要綱は以下のサイトからダウンロードできます (Special Features: For Organizers):

<http://www.springer.com/life+science/s/ecology/journal/10144>

どうかふるってご提案ください.

編集長・佐藤一憲

表 1. Population Ecology 編集統計 (2014 年 6 月 10 日現在)

投稿 (2013 年分)

	国内	国外	合計
受理	10	32	42
棄却	8	111	119
未決	2	11	13
取り下げ	0	2	2
合計	20	156	176
受理率	55.6%	22.4%	26.1%

原稿種別

	原著	総説	特集	合計
受理	35	2	5	42
棄却	119	0	0	119
未決	12	0	1	13
取り下げ	2	0	0	2
合計	168	2	6	176
受理率	22.7%	100.0%	100.0%	26.1%

投稿 (2014 年分)

	国内	国外	合計
受理	0	0	0
棄却	1	26	27
未決	15	39	54
取り下げ	0	0	0
合計	16	65	81
受理率	0.0%	0.0%	0.0%

原稿種別

	原著	総説	特集	合計
受理	0	0	0	0
棄却	27	0	0	27
未決	41	2	11	54
取り下げ	0	0	0	0
合計	68	2	11	81
受理率	0.0%			0.0%

インパクトファクター

2006	2007	2008	2009	2010
1.534	1.314	1.895	1.539	1.846
2011	2012	2013		
2.287	1.923	?		

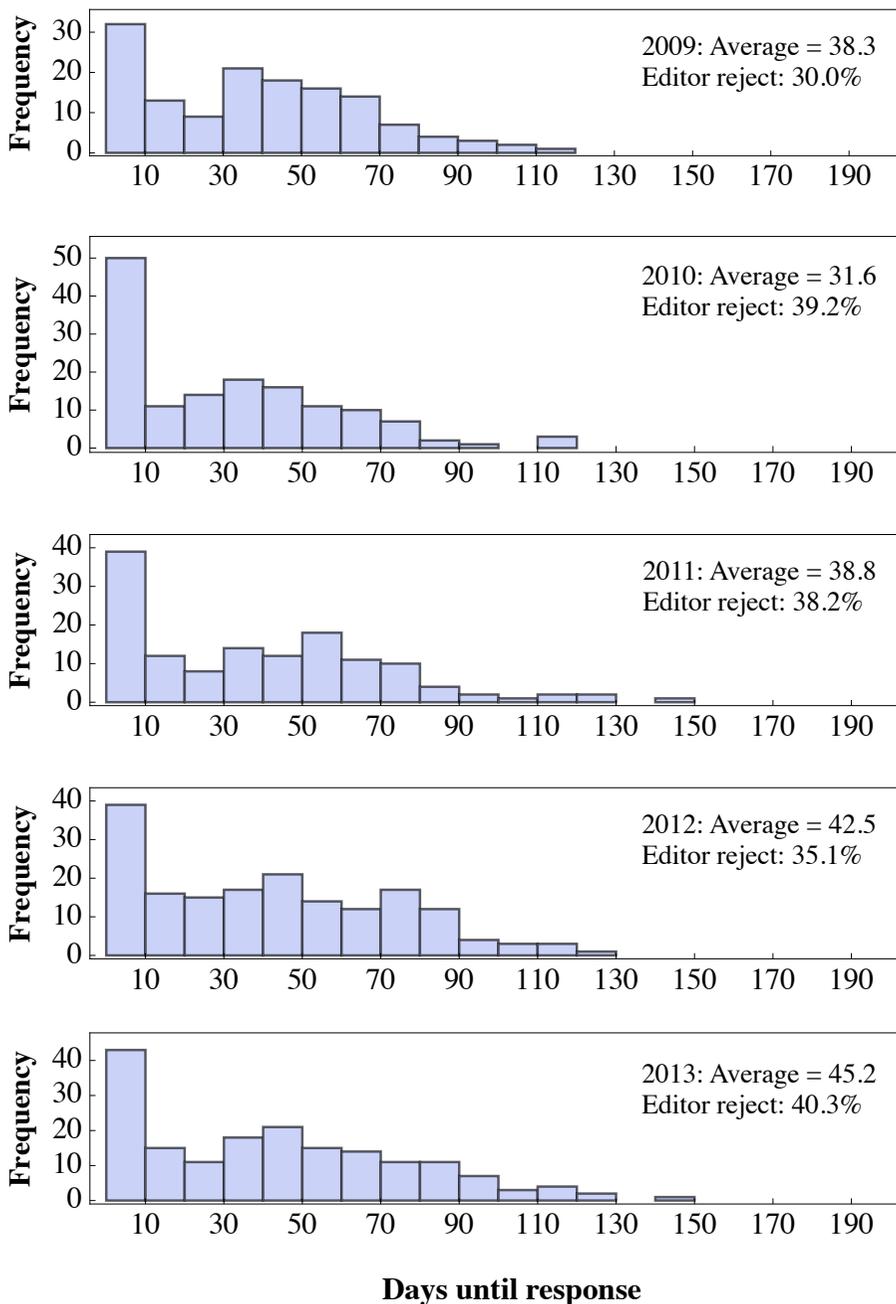


図1. 1回目の審査終了までの日数ごとの論文数(2009年から2013年). "Editor reject"は審査に回らず編集長, 副編集長, 担当編集委員の段階で棄却された原稿の割合を示す.

個体群生態学会会則

第1章 総 則

- 第1条 (名称) 本会は個体群生態学会 (英名 The Society of Population Ecology) と称する。
- 第2条 (目的) 本会は個体群生態学の進歩発展を促し、基礎および応用各分野の研究者間の連絡、協力をはかることを目的とする。
- 第3条 (事業) 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。
- (1) 会誌『Population Ecology』の発行
 - (2) 会報『個体群生態学会会報』の発行
 - (3) 研究集会、シンポジウムなどの学術的会合の開催
 - (4) 内外の関係ある諸学会、諸機関との連絡
 - (5) 個体群生態学会奨励賞の授与
 - (6) その他本会の目的を達成するために必要な事業
- 第4条 本会の事務所は、〒603-8148 京都市北区小山西花池町 1-8 土倉事務所内に置く。

第2章 会 員

- 第5条 (会員) 本会の会員は国内正会員、永年会員、海外正会員、賛助会員の4種類とする。
- (1) 国内正会員は本会の趣旨に賛成し所定の会費を納めた国内在住の個人で、会誌、会報の配付を受ける。
 - (2) 永年会員は本会の趣旨に賛成し会員歴30年以上70歳以上の個人で会費を免除され会誌、会報の配付を受ける。
 - (3) 海外正会員は本会の趣旨に賛成し所定の会費を納めた海外在住の個人で会誌の配付を受ける。
 - (4) 賛助会員は本会の趣旨に賛成し所定の会費を納めた個人または団体で会誌の配付を受ける。
- 第6条 (入会) 本会に入会を希望するものは所定の入会申し込み用紙に必要事項を記入し、その年度の会費を添えて本会事務所に申し込まねばならない。
- 第7条 (退会) 会員で退会しようとする者は、その旨本会事務所に申し出なければならない。
- 第8条 (義務) 会員は本会会則を守らなければならない。会費は前納制とする。3年間会費を滞納した場合は退会したものとみなす。
- 第9条 (権利) 会員は次の権利を有する。
- (1) 国内正会員は1) 研究集会にその業績を発表できる。2) 会長、運営委員の選挙権、被選挙権を持つ。3) 研究集会、シンポジウムなど本会が行う学術的会合に出席することができる。4) 総会に出席し意見を述べるすることができる。
 - (2) 永年会員は、永年会員になる前の権利を保持する。
 - (3) 海外正会員は研究集会にその業績を発表できる。
 - (4) 賛助会員は研究集会、シンポジウムなど本会が行う学術的会合に参加することができる。

第3章 役員

第10条 本会に次の役員をおく。

- (1) 会長1名、次期会長1名、運営委員12名、編集委員約20名、会計監事2名、事務長1名。

第11条 (1) 会長は本会を代表し会務を統べる。任期は2年で再任を禁ずる。
(2) 次期会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときは職務を代行する。任期は2年で再選を妨げる。
(3) 会長には、任期を満了した次期会長を充てる。

第12条 運営委員の任期は2年とする。連続3選を禁ずる。

第13条 (次期会長、運営委員の選挙)

- (1) 次期会長および運営委員は国内正会員の互選によって選ばれる。
- (2) 次期会長は単記、運営委員は12名の連記(いずれも無記名)の投票で同時に選挙を行う。
- (3) 次期会長は運営委員を兼ねることができる。
- (4) 次期会長選挙においては、同票のときには高齢者を当選とする。運営委員選挙の場合には、下位同票のときには役員未経験者、若年者の順で当選とする。
- (5) 選挙は前任者の任期満了の年度に行う。
- (6) 任期中に会長に欠員が生じた場合には、次期会長が会長となり前任者の任期の残余期間に加え次期2年間の会長を務める。
- (7) 任期中に次期会長に欠員が生じた場合には、次点者を繰り上げる。

第14条 (1) 編集委員長は運営委員会の上承を経て、会長が委嘱する。任期は2年で再任を妨げない。
(2) 編集委員は編集委員長が指名し、運営委員会の上承を得て会長が委嘱する。編集委員は会誌の編集、刊行に関する評議を行う。任期は2年で再任を妨げない。

第15条 会計監事は運営委員会により選出され、会計監査を行う。任期は2年で再任を妨げない。

第16条 事務長は事務一般を執行する。運営委員会の上承を得て会長が委嘱する。任期は2年で再任を妨げない。

第4章 運営委員会

第17条 本会に運営委員会をおく。運営委員会は会の運営方針を審議する。ただし緊急事項は総会に代って決定することができるが、次回総会において承認を得なければならない。運営委員会は会長が必要に応じて召集する。

第18条 運営委員会は、会長と運営委員により構成される。

第19条 運営委員会の議長は、会長が務める。

第20条 運営委員会の議決は、運営委員会構成員の過半数による。可否同数の時は議長が決する。

第5章 総会

第21条 総会は会の最高議決機関であり、会務、会計そのほか重要事項を議決する。総会は会長が招集し、原則として1年に1回開催する。ただし運営委員会の上承を経て臨時総会を開催することができる。

第22条 総会の議決は出席者の過半数による。可否同数の時は議長が決する。

第6章 会計

- 第 23 条 本会の経費は会費その他の収入でまかなわれる。会費の年額は運営委員会の審議を経て総会の決議によって定める。
- 第 24 条 本会の会計年度は 4 月 1 日に始まり翌年 3 月 31 日に終わる。
- 第 25 条 会長は収支決算を会計年度ごとに運営委員会に報告して承認を受けなければならない。また前年度の決算を総会で報告しなければならない。

第 7 章 雑 則

- 第 26 条 会則の変更は運営委員会の議を経て総会の議決によって行う。
- 第 27 条 本会則は 1981 年 11 月 12 日より適用する。(1983 年 11 月 11 日、1984 年 11 月 10 日、1986 年 12 月 4 日、1993 年 10 月 2 日、1997 年 10 月 25 日、1999 年 10 月 23 日、2001 年 10 月 27 日、2004 年 9 月 1 日、2005 年 10 月 29 日、2006 年 11 月 19 日、2009 年 10 月 17 日一部改定)

(附 則)

- 第 1 条 第 11 条第 3 項の規定にかかわらず、2011 年度・2012 年度の会長に限っては、次期会長と同時に選挙し単記投票で 1 位者を会長、2 位者を次期会長とする。
- 第 2 条 第 12 条の規定にかかわらず、2011 年度・2012 年度の運営委員選出にあたっては、上位 6 名に限って連続 3 選を妨げない。下位同票の場合は、役員経験者、年長者の順に当選とする。

収入が少ない若手会員の学会費を学生会員と同額にする措置

個体群生態学会の若手会員の中には、アクティブに研究活動をされているにも関わらず、必ずしも職に恵まれない会員が少なくありません。個体群生態学会では、こうした収入が少ない若手会員のために、学会費を学生会員と同額にする措置を実施します。

対象は、40歳未満で年間収入が200万円以下の一般会員で、申請に基づいて翌年度の会費を学生会員と同額にします。年齢については学会費の年度の4月1日現在とします。申請する時点で今年度の学会費が納入済であることが必要です。また、毎年度申請が必要となります。

(2011年10月15日制定)

学会費減額の申請方法

申請は、下記の2種類の書類(申請書と確認書)を個体群生態学会事務長に提出してください。申請書は必ず提出が必要です。確認書は、所属機関の長や大学院での受入研究者(あるいはそれらに準ずる方)により申請条件に該当することを確認してもらうもので、公的機関の収入の証明等で代えることができます。今年度の学会費入金を済ませてから申請して下さい。申請の締め切りは、**1月31日(必着)**です。

申請書様式

申請書

個体群生態学会の、収入が少ない若手会員の学会費を学生会員と同額にする措置の条件に該当するため、2013年度の学会費を学生会員と同額にするよう申請します。

氏名：

所属：

連絡先：

電子メール：

生年月日： 年 月 日 (2013年4月1日現在で満 歳)

署名・日付

確認書様式

確認書

個体群生態学会会長殿

申請者氏名：

上記の者は、個体群生態学会の、収入が少ない若手会員の学会費を学生会員と同額にする措置の条件に該当することを確認します。

確認者 所属・氏名：

申請者との関係(例、現在の所属の長、大学院在学時の指導教員など)：

確認者 署名・日付

収入が少ない若手会員の学会費を学生会員と同額にする措置

40歳未満で年間収入が200万円以下の会員について、申請に基づき、学会費を学生会員と同額にする(2011年10月15日、総会決定)

個体群生態学会奨励賞に関する運営委員会申し合わせ

- 第1条** 個体群生態学会奨励賞は、本学会員もしくは会誌に論文を掲載した者で、個体群生態学の優れた業績を挙げた若手研究者に授ける。受賞者は、自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれる。なお、受賞は原則として毎年1名とする。
- 第2条** 個体群生態学会奨励賞候補者を選考するため、個体群生態学会奨励賞選考委員会（以下委員会）を設ける。
- 第3条** 委員会の委員は5名とする。委員は運営委員会での協議により個体群生態学会学会員の中から選出する。委員長は委員の互選により定める。委員の任期は2年とし、1年毎に2ないし3名を改選する。ただし任期満了後2年間は再選されることができない。
- 第4条** 委員会は応募書類をもとに受賞候補者を絞り、受賞候補者を運営委員会に推薦する。運営委員会は、推薦された受賞候補者を審議し、受賞者を決定する。
- 第5条** 受賞者の決定は、授賞式が行われる3ヶ月前までに行う。
- 第6条** 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状を贈呈する。
- 第7条** 受賞者は、原則として、その授賞式が行われる大会において記念講演し、その内容を本学会の会誌に総説として投稿する。
- 第8条** この申し合わせの変更には運営委員の3分の2以上の同意を要する。

(2005年10月29日制定)

(2011年10月14日改訂)

(2012年6月16日改訂)

研究助成団体への学会推薦に関する運営委員会申し合わせ

個体群生態学会の会員が各種の研究助成・賞に応募されるにあたって、学会推薦を求める場合、学会は以下の基準・確認に基づき、その手続きを行う。

- 1) 応募（申請）内容が個体群生態学会として評価できるものであること。
- 2) 応募内容に関連する研究成果が個体群生態学会で応募者により発表されていることが望ましい。
- 3) 助成を受け、その研究成果を公表する場合は個体群生態学会の出版物あるいは大会で行うこと。
- 4) 応募書類（申請書）は、原則として、応募締め切りの 30 日前までに学会事務長に提出すること。
- 5) 申請の結果について、学会事務長に速やかに報告すること。

以上において、推薦枠以上の応募がある場合は、関連分野の会員（複数）による審査を行う。これに基づき、運営委員会は推薦順位を付け、上位から推薦枠内の応募を推薦する。

また、

- 1) については、必要に応じて関連分野の会員のコメントに基づき、運営委員会が判断する。
- 2) については、1) の評価や推薦枠以上の応募がある場合の順位付けにおいて考慮するものとする。
- 4) については、審査を締め切り 10 日以前に終わらせ、本人に結果を通知することとする。

上記の取り決めの改訂は、運営委員会の承認を必要とする。
(2011 年 10 月 14 日制定)

再入会希望者の取り扱いについての運営委員会申し合わせ

個体群生態学会を退会した後に再入会を希望するものについては、過去に会員としての権利を行使した期間の会費を全て納入した場合についてのみ、再入会を認めることとする。

(2011 年 10 月 14 日制定)

会員異動

個人情報保護法に鑑み、個体群生態学会会報のWeb版では会員の異動情報を公開しておりません。

会員情報変更の際の連絡のお願い

メールアドレスの変更も含め、会員情報に変更があった場合には、個体群生態学会の Web サイトの「会員手続」を通じて必ずご連絡ください。

編集後記

本号の出版が例年よりも1ヶ月以上も遅れてしまい、誠に申し訳ありませんでした。つくば大会の講演申込の締切日までに出版が間に合わなかったことを深くお詫び致します。

編集が大詰めになる時期にいろいろと仕事が入ったことや、私自身が沢登りの下山時に転倒し、右手首をバッキリと切って3針縫うという怪我をしてしまったことなどで、なかなか最後の編集作業が進まなかったということもあります。しかし、一番の原因はこれらの仕事を早めに片付けずに後回しにしてしまったことです。今後は気をつけていきたいと思うところですが、実はこの号で私の編集担当は最後になります。

気がつけば、4年間もこの編集担当を引き受けていました。私が担当してから始めた特集「研究者の海外滞在記」ですが、今回は日本人の海外滞在記ではなく、海外から日本に留学した外国人研究者に思うところを好きなように書いていただきました。日本とアメリカの進化学・生態学についての研究の違いは大変興味深いものでした。これから海外留学する若い学生や研究者にはぜひ読んでもらいたいと思います。

去年の夏に Ultra-Trail du Mont-Blanc というヨーロッパアルプスで行われた山岳

マラソンに参加してきました。このレースは、モンブランの周囲 168km を 46 時間以内で走破するというもので、2晩寝ずに走り続けて、なんとか 43 時間台で完走しました。こういう体力は維持できても、年齢による衰えはいろいろと体に出てきますね。

ここ数年で、だいぶ老眼が進みました。論文や書物を読むのも一苦勞です。そろそろ老眼鏡や遠近両用眼鏡のお世話にならないといけないでしょうか。この編集作業も結構苦勞しました。もうしばらく教育・研究の生活が続くことを考えると、早急に対応して、作業効率を老眼になる前のレベルに戻さなければと思うこの頃です。それでも登山、スキー、ランニングなどのスポーツをしていることで、体の衰えもこの程度で済んでいるのかもしれませんが。今後もアンチエイジングで行こうと思います。

次号からは九州大学の津田みどりさんに編集担当をバトンタッチ致します。4年間お付き合いいただきまして、どうもありがとうございました。今後ともこの白表紙をよろしくお願い致します。

個体群生態学会会報編集担当
石原 道博
(大阪府立大学大学院理学系研究科)

個体群生態学会への連絡先

1. 退会・住所変更・会費納入に関する問い合わせ先

〒603-8148

京都府京都市北区小山西花池町1-8

(株)土倉事務所内 個体群生態学会

TEL 075-451-4844

FAX 075-441-0436

郵便振替口座

口座番号 : 00950-6-97521

口座名称 : 個体群生態学会

メールアドレスの変更も含め、会員情報に変更のあった場合には、必ず土倉事務所に連絡をお願いいたします。

2. その他の学会業務に関する問い合わせ先

〒074-0741

北海道雨竜郡幌加内町母子里

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター

個体群生態学会 事務長 内海俊介

TEL 0165-38-2125

FAX 0165-38-2410

個体群生態学会会報 No. 71
ISSN0386-4561

2014年8月31日印刷
2014年8月31日発行

発行 個体群生態学会

〒603-8148

京都府京都市北区小山西花池町1-8

(株)土倉事務所内

印刷 (株)サガプリンティング

〒849-0936

佐賀市鍋島町森田909番地

TEL 0952-34-5100

FAX 0952-34-5200

